

知内町

湯の里 3 遺跡

— 津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(2) —

昭和60年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

知内町

湯の里 3 遺跡

— 津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(2) —

昭和60年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



i 朱漆塗櫛 (No. 1)



ii 朱漆塗櫛 (No. 3)

例　　言

1. 本書は、津軽海峡線（北海道方）建設に伴い、昭和60年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の報告書である。
2. 本書の執筆は、IV—4—(1)を葛西智義、Vを花岡正光・藤田健一・枝谷　徹、そのほかを千葉英一が担当した。
3. 動・植物遺存体の同定は、動物が金子浩昌氏、植物が矢野牧夫氏によるものである。
4. 図の方位は、すべて磁北（西偏約8°10'）である。
5. 出土資料については、知内町教育委員会が保管する。
6. 次の機関・各氏からは指導・協力等を賜り、謝意を表する次第である。

北海道教育委員会

知内町教育委員会

日本鉄道建設公団知内鉄道建設所

早稲田大学 金子浩昌氏

北海道開拓記念館 矢野牧夫氏

知内町郷土資料館 高橋豊彦氏

北海道教育大学地学教室学生 藤田健一氏

同

枝谷　徹氏

目 次

口 絵 i 朱漆塗櫛 (No.1)	
ii 朱漆塗櫛 (No.3)	
例 言	
I 調査要項	1
II 調査の経緯	1
III 遺跡の位置と立地	4
IV 調査	4
1 発掘区の設定	4
2 地層	5
3 造構	5
4 遺物	7
(1) 土器	7
(2) 石器	22
(3) 漆塗製品	32
(4) 石製品	32
(5) 土製品	32
(6) 旧石器時代の遺物	35
(7) その他	35
V 火山灰について	37
1 試料の処理	37
2 各火山灰の特徴	37
3 火山灰の年代	39
4 まとめ	39
まとめ	41

図1 遺跡の位置	2
図2 遺跡周辺の地形	3
図3 発掘区設定図および調査平面図	4
図4 層序模式図	5
図5 石組炉および焼土分布図	6
図6 土器の分布	7
図7 A・B群土器	11
図8 C群土器(1)	12
図9 C群土器(2)	13
図10 C群土器(3)	14
図11 C群土器(4)	15
図12 C群土器(5)	16
図13 D・E群土器	17
図14 石器(1)	23
図15 石器(2)	24
図16 石器(3)	25
図17 石器(4)	26
図18 石器(5)	27
図19 石器(6)	28
図20 石器(7)	29
図21 石器(8)	30
図22 石器(9)	31
図23 石製品・土製品	33
図24 旧石器時代の遺物	34
図25 地質柱状図	37
図26 火山灰の鉱物組成	38
図27 湯の里3遺跡周辺の火山灰層序と年代を示す模式図	39
写真 火山灰の顕微鏡写真	40

図版 I 調査状況(上)・石組炉検出状況(下左)・C群土器・梅出土状況(下右上)・石組炉(下右下)	43
図版II 調査状況(上)・河川跡部分(下)	44
図版III A・B群土器	45
図版IV C群土器(1)	46
図版V C群土器(2)	47
図版VI C群土器(3)	48
図版VII C群土器(4)	49
図版VIII C群土器(5)	50
図版IX C群土器(6)	51
図版X C群土器注口部(上)・C群土器突起貼付例(下)	52
図版XI D・E群土器	53
図版XII 土製品・石製品	54

表 1 図掲載土器一覧	21
表 2 図掲載石器一覧(1)	35
表 3 図掲載石器等一覧(2)	36

I 調査要項

事業名 津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査

委託者 日本鉄道建設公団札幌支社

受託者 財團法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名 湯の里3遺跡

所在地 上磯郡知内町字湯の里44-4・6・18~22番地

調査面積 830m²

調査期間 昭和60年4月1日～昭和61年3月31日

発掘期間 昭和60年5月10日～昭和60年6月21日

調査体制 財團法人 北海道埋蔵文化財センター理 事 長 植村 敏

専務理事 山本慎一

常務理事 藤本英夫

業務部長 間宮道男

調査部長 中村福彦

調査第四班長 大沼忠春

文化財保護主事 千葉英一(発掘担当者)

〃 遠藤香澄

〃 熊谷仁志

〃 立川トマス

嘱託 花岡正光

〃 葛西智義

II 調査の経緯

津軽海峡線（北海道方）の新設工事に伴い、財團法人北海道埋蔵文化財センターは日本鉄道建設公団の委託を受けて、昭和58年度に湯の里2～6遺跡の発掘調査を実施したが、湯の里3遺跡については家屋の移転等用地問題が解決せず、大部分が調査未了となっていた。昭和59年度も一部を調査ただけであり、この両年度の調査については昭和60年3月に「湯の里遺跡群」一冊北海道埋蔵文化財センター調査報告第18集の一編としてすでに報告されている。昭和60年に用地問題が解決したことにより、残っていた面積のすべてについて発掘調査を実施した。

なお、年度別の調査面積は次のとおりである。

昭和58年度 181m²

昭和59年度 100m²

昭和60年度 830m²

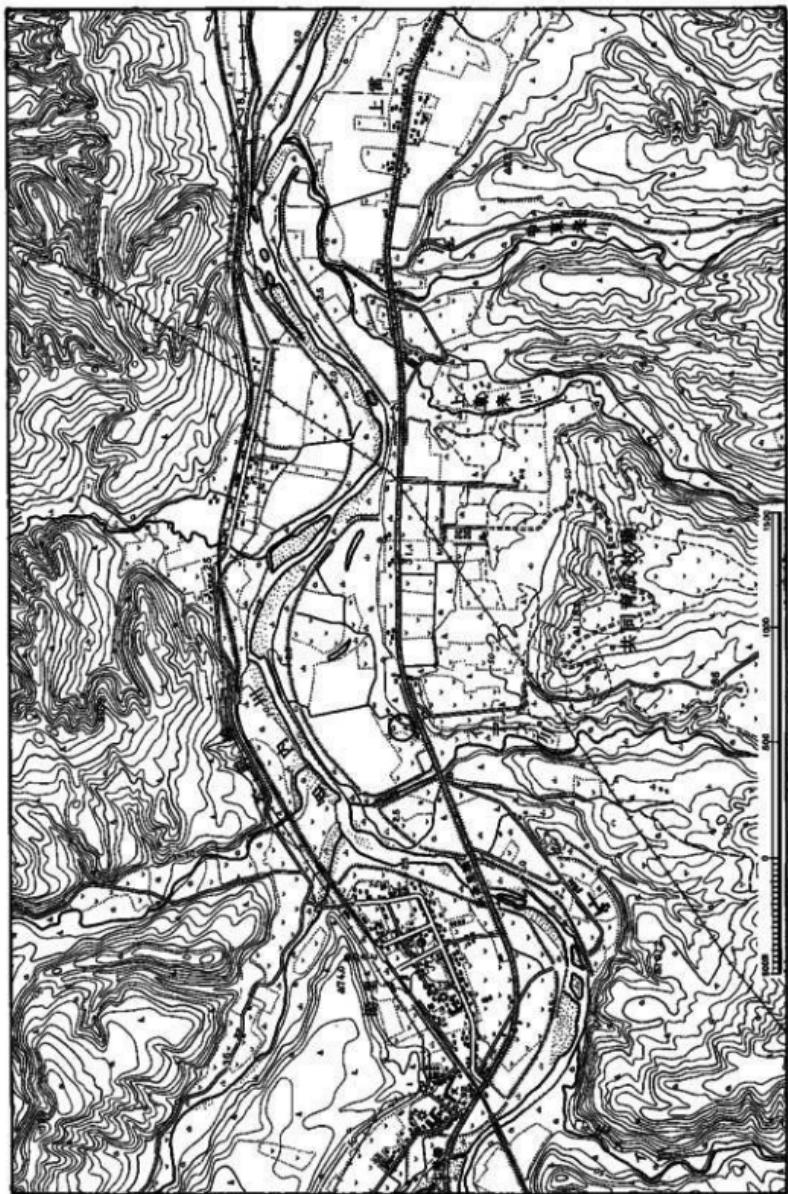


図1 遺跡の位置（この図は国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「湯ノ里」を使用した）

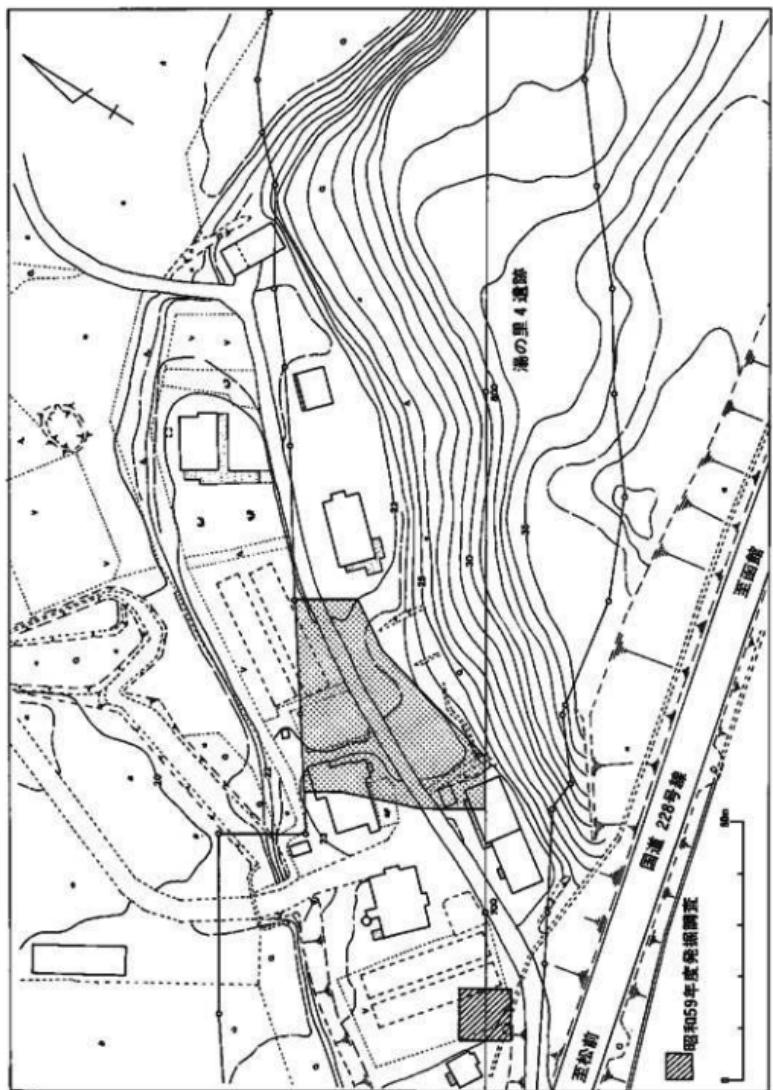


図2 道幹周辺の地形

III 遺跡の位置と立地

知内町は、渡島半島の西南部、津軽海峡に面し、函館市から西へ約50kmに位置する。遺跡の所在する湯の里地区は、町を貫流する知内川の河口から上流約9kmにあり、湯の里2~6の遺跡群はいずれも知内川右岸の河岸段丘上に立地している。この段丘面については、昭和58年度の調査の際に下位から三面が確認されているが、本遺跡はこのうちもっとも低位の段丘面に立地しており、その標高は約23mである。

IV 調査

1. 発掘区の設定 (図 3)

発掘区の設定は昭和58・59年度の方式をそのまま踏襲した。すなわち、センターラインを発掘区のMラインとし、北側へ10mごとにL・K・J・Iラインとした。これに直交するラインを鉄道予定線の距離標に基づいて10mごとに設定し、二桁の数字で示した。さらにこの10m四方の区画を5m四方に四分割して、反時計まわりにa～dの小区画を設定した。したがって、例えばJ-73-aというような呼称となる。

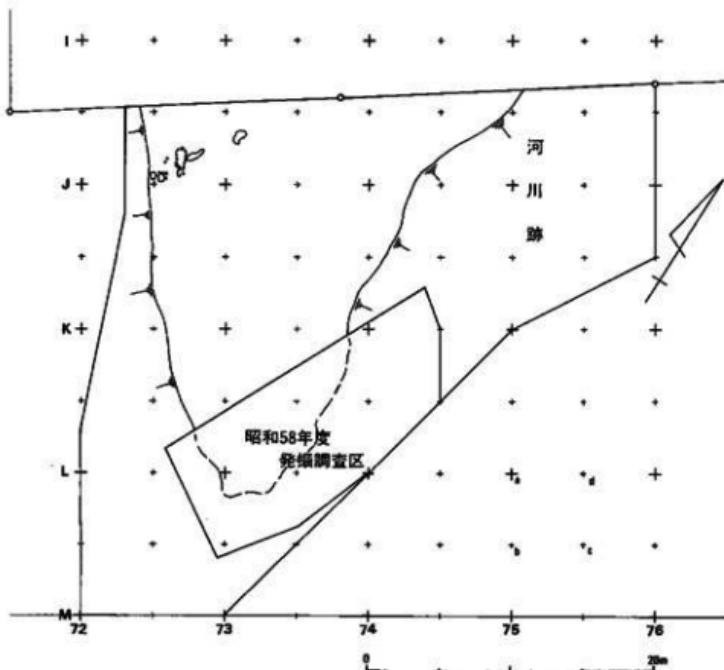


図3 発掘区設定図および調査平面図

2. 地層

湯の里 3 遺跡における基本的な層序は次のとおりである。

I 層 住宅部分にみられる盛土（砂利）である。

II 層 住宅部分では本来の黒色を呈する土層で、厚さ10~15cm。そのほかでは褐色を呈する表土で、耕作などにより III 層の火山灰が混在する。厚さ20~30cm。河川跡では部分的に耕作土下位に灰白色火山灰があり、本来の I 層へと続く。

III 層 黄白色火山灰層。厚さ10~30cm。住宅部分では黄色味が強く、部分的に脱色（白色）化した層に入る。河川跡では脱色化が進み、酸化鉄による褐色を呈する部分を境として、上位の砂質部と下位の粘質部とに分けられる。

IV 層 黒色土層。やや粘質性があり、厚さ30cm。この層の上半部から縄文・統縄文時代の遺物が出土し、下半からは礫が著しく多くなる。

V 層 深褐色～黄褐色土層。漸移層で、やや粘質性があり、厚さ10~20cm。この層の下部から VI 層の上部にかけて旧石器時代の遺物が出土している。

VI 層 黄褐色～黄色粘質土層。地山。旧石器時代の遺物が出土したところでは脱色化が認められる。

3. 遺構

検出された遺構は、石組炉 1 基、焼土 4 カ所である（図 5）。

石組炉

I-72-c 区で、住宅の基礎を除去後、II 層の黄白色火山灰層を剥土中に長方形にめぐる石組を確認した。長軸は北西～東南で、大小16個（S-9 は焼土中）の礫によって構築され、その規模は外側で長さ約1.5m、幅約0.8m、炉内は長さ約1.1m、幅約0.5mである。S-8 および S-10 の半分は焼土の上にのっており、そのほかはすべて III 層を振りこんでえられている。炉のほぼ中央部には、径14cm、深さ10cmの円形の小ピットがある。

出土した遺物は、炉内の焼土を水洗することによって得られた土製の玉（図23-156）1 点である。

焼土

石組炉の周辺において 4 カ所確認されたが、いずれも遺物は出土していない。

F-1 I-73-b 区 最大厚 8 cm

F-2 I-72-c 区 最大厚 10 cm

F-3 I-72-c 区 最大厚 11 cm

F-4 I-72-b-c 区 最大厚 9 cm

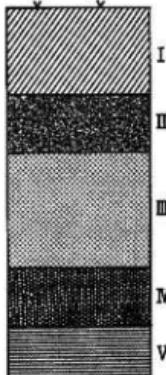


図 4 層序模式図

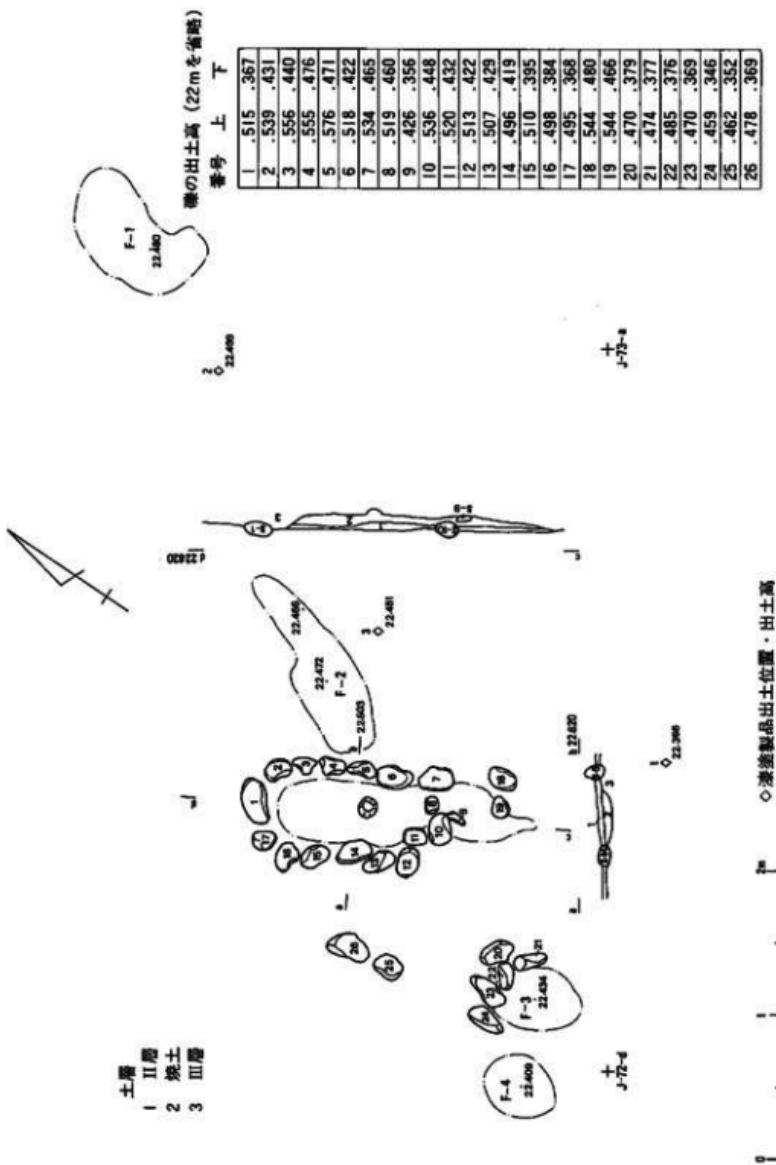


図5 石組炉および焼土分布図

4. 遺物

(1) 土器

15,000点余の土器片が得られている。ここでは、これらを次の5群に分類した。

A群：縄文時代前期の円筒土器下層式に相当するもの。

B群：涌元式（吉崎 1965・高橋 1974・森田 1981）や松前町原口遺跡（西連寺 1976）

出土の土器に相当し、縄文時代後期前葉に位置づけられるもの。

C群：縄文時代後期末葉の瘤付土器（第IV段階—安孫子 1969）に相当するもの。

D群：縄文時代晚期中葉の大洞C₂式に相当するもの。

E群：統縄文時代の恵山式土器と弥生式系の土器に相当するもの。

出土点数では、C群土器が90%以上を占め、ついでB群が多い。A・D・Eの各群は、それぞれ1%にも満たない出土である。発掘区での各群の出土傾向を下図に示した。各群の1グリッドあたりの平均出土数を求め、それを上回るところを括ったものである。出土点数の多いB・C群は図示された範囲より広く、河川跡にはさまれた平坦面全体から出土しているが、多出するのは北西側の調査範囲外と接する部分である。C群がB群に較べて北西側にのびている事は、河川跡の埋まり方とも関連するかもしれない。A・D・E群は分布といえる程の拡がりを示さず、一括出土遺物の得られた地点が括られた程度である。

A群（図7-1～3）

1・2は網目状撚糸文の施されたもの、3は多軸絡条体による文様の施されたものである。

胎土には纖維の混入が認められる。

B群（図7-4～26）

4・5は復原実測されたもの、6は破片の円弧から器形を推定したものである。4・6には沈線で区画された口縁部と胴部文様帯に縄文が加えられている。口縁部の縄文は原体の横回転によるものであるが、胴部では沈線で描かれた文様の流れに応じて、原体の回転方向も変化している。

7～11は口縁部破片である。折りかえし口縁で、その下位は無文、あるいは無文帯となっている。10には、小突起の下位に、小さな楕円形の貼付がある。

12～23は胴部破片である。12～16には、沈線と縄文による文様が描かれ、18・19はこれに刺突の加わったものである。すり消し縄文、充填縄文の手法の認められるもの（12～14、19）と認められないもの（15～18）とがある。

21～23は縄文のみの認められる土器片である。

21は無節の縄文で、器体に屈曲がある。22・

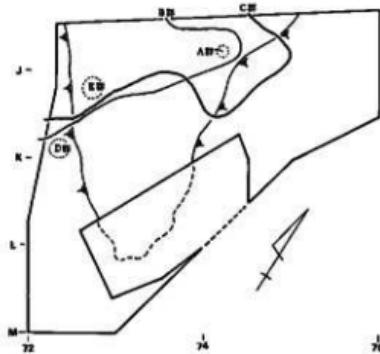


図6 土器の分布

23は原体の縦回転による縄文である。

5・25・26は、下地に縄文がみられず、無文面上に沈線で文様を描いている。25は他と異なり、口縁部が内反している。椀状を呈する小～中型の土器と思われる。26には肥厚部が認められる。10の貼付に類似するもので、口縁部近くの破片であろう。

C 群（図8～12-27～106）

27～47は復原実測されたものである。これらは器形をもとにa類：鉢形土器とb類：壺形ないしは注口土器とに大きく分けた。

a 類（27～41）：深鉢または鉢と考えられる土器である。これらはさらに、数種の文様をもち装飾性の高いもの（27～31）と文様の1～2種に限られる装飾性の低いもの（32～41）とに分けられる。前者には比較的大型のものが多い。40・41は浅鉢である。

27—器体上半部に文様帯が設けられ、下半部は滑らかな無文面となっている。器形もこれと関連するように、上半部では直立し、下半部で曲線的にすぼまる。口縁には3個1組の突起が4カ所ついている。突起の内側には、器表に施された爪形文と類似する刺突がある。文様は貼付・縄文・爪形刺突・沈線の順に施されている。文様帯下位を区画する沈線は、無文面の調整によって消えているところがある。

28—上半部に文様帯があり、下半部は無文面となっている。27に較べると文様帯部分が外傾しており、下半の無文面のすばまりが弱い。器体の半分を欠いているが、突起は12個と思われる。胴部の貼付には2種類ある。刻みのある小豆状の貼付を2個並べたものと精円形の貼付上に2つの刻みのはいったものとが交互につけられている。これらは口縁突起に対応する個数をもつと思われる。施文順位は縄文・貼付・爪形刺突・沈線の順である。爪形刺突には、粘土の盛りあがりが顕著である。

29—28と共に通する器形をもち、上半に文様帯、下半に無文面がある。突起は、2個1組のものが一つ残存しているのみである。突起に対応すると思われる胴部貼付は2カ所に残っており、その位置関係からは突起・貼付ともに4カ所についていたと推測される。沈線間にある刺突は正面から突かれており、粘土の盛りあがりを伴う爪形刺突とは趣を異にしている。文様帯の中央部では磨り消し手法が認められ、三叉文風の文様が加えられている。施文順位は貼付・縄文・沈線・刺突の順である。

30—無文面は設けられているが、沈線による区画は行われていない。また使用による為か、無文面の滑らかさが失われている。口縁には、2山の突起が4カ所につけられている。胴部の貼付は、突起下とその中間部に配置されている。文様は貼付・縄文・爪形刺突の順に施されている。

31—下半部を欠いているが、欠損部近くに滑らかな無文面が確認される。30と同じく、文様帯から縄文がはみ出している。器体は荒れが目立ち、特に内面は炭化物の付着により汚れている。突起は、2山のものが6カ所につけられている。文様は縄文・爪形刺突・沈線の順に施されている。

32—器体上部の半分のみ残存している。突起は、2山のものが4ヵ所につくと思われる。そのうちの一対には刻みがつけられているが、他方の一対ではない。楕円形に描かれる沈線は、突起下でつながるように展開している。

33—刻みのある突起が7ヵ所にある。その中間部には、同じく刻みのある貼付が配置されている。器表は荒れているが、炭化物の付着は少なく、内面の汚れもほとんどない。口縁部の爪形刺突は、突起を結ぶように弧状につけられている。地の繩文は複節である。

34—突起をもつ以外は繩文のみの施された土器であるが、下方に滑らかな繩文のない部分があり、あるいは無文面をもつかもしれない。口縁部はやや外反ぎみである。突起は、2山のものが4ヵ所につくと思われる。

35—底部のみ残存しており、明確に器形を知りえないが、44・45に比較すると胴部への拡がりが弱く、深鉢の底部とした。接地面周辺は滑らかに調整され、無文面となっている。

36—繩文だけが施された鉢である。口縁は平縁で突起をもたない。内外面ともに汚れており、特に内面には炭化物の付着が著しい。

37—小型で薄手に造られている。器面の汚れは少ない。あらかじめ口縁部をなでつけ滑らかにした後、爪形刺突をめぐらせていている。このため刺突の部分で器体の膨らみがおさえられ、口縁部が外反している。

38—小型であるが、厚ぼったい。口縁に1条の沈線がめぐらされているが、きわめて浅いものである。器面には汚れが認められる。

39—底部へのすばまりの弱い鉢で、平底になっている。無文の土器であるが、すり跡のような傷が口縁では横位に、胴部では斜位にはいっている。器面の汚れは少ない。

40—小突起が2個残存している。等間隔の3突起になるか、間隔のずれた4突起になると思われる。繩文は、表面の磨耗や剥落によって確認されない部分がある。汚れは内面に顕著で外面にはほとんど認められない。

41—6個の突起をもち、突起上には刻みがついている。沈線は、突起の間に描かれた弧状の沈線と突起下を起点とする沈線とを結ぶように展開している。

b 頸(42~47)：器体に明瞭な屈曲や段をもち、壺あるいは注口土器と考えられるもの。

42—2山の突起と1山のものとが、交互に3個づつつけられた口縁部である。突起下には貼付がある。沈線と繩文の施された部位には、赤色顔料が付着しているが、下位の無文面には認められない。剥げた事も考えられるが、施文部分のみに塗布された可能性が高い。

43—4突起をもつ口縁部で、42に較べると口縁の外反が強い。文様では、沈線によって繩文部と無文部とが区画されている。繩文部には、赤色顔料の付着が認められる。これも部分的な塗布かもしれない。

44—繩文のみが施された壺の下半部である。器面の汚れは少ない。

45—大型の壺で、下半部のみ残存している。図示されていないが、底部近くまで補修孔が穿たれている。色調では、底部周辺が赤変しており、その上位はくびれのあるあたりまで炭化物

の付着により黒ずんでいる。

46—壺で、口縁部は直立している。突起は1個残存しているだけであるが、4突起と推測される。胸部の文様は欠損部が多く不明瞭であるが、楕円形のモチーフの中にさらに弧線を加えている。磨消手法も認められるが、丹念ではない。器面の汚れは少ない。

47—薄手に造られた注口土器である。頸部の上下と注口部に沈線がめぐる他は、無文である。器面は荒れや剥落が多いが、汚れは少ない。

48~106は破片で得られた土器である。復原土器に準じた配列をしている。

48~86は、鉢形土器の口縁部である。48~59が沈線文を主体とした装飾性の高いもの、60~86が装飾性の低いものと考えられる。前者では、55までが爪形刺突文の加えられたもので、52~55には粘土の盛りあがりがみられない。57は、縄文の一部が羽状を呈している。59は、無文地に弧状の細い沈線を連ねた文様が描かれている。装飾性の低いものでは爪形刺突をもつもの(60~67)、突瘤文をもつもの(67~70)、縄文のみのもの(71~81)、無文のもの(82~86)がある。67には、爪形刺突と突瘤文の両者が認められる。突起には四つの刻みが加えられている。69には焼成前にあけられた貫通孔があり、そのために突瘤文の間隔が不均等である。71・72は羽状縄文を呈する土器である。73・82・83は小波状を呈する口縁である。86は、器形を推定復原した無文の深鉢である。

87~93は、鉢形土器の胴部破片である。89にみられる沈線のモチーフは他に類例を見出せず、B群に属する可能性もあるが、厚さと破れ口の角度から本群に含めておく。93には、無文地に細い沈線で文様が描かれている。

94~100は屈曲をもつ胴部破片で、壺形ないし注口土器と思われる。96では爪形刺突と異なり、円形に近い刺突がある。99は貫通孔の穿たれた把手のある土器で、類例に乏しいものである。100は注口土器と思われる。上下を沈線で区画した貼付がめぐっているが、大半が剥落している。101~106は注口部である。103は、あらかじめ注口をつける位置に孔を開けていたのか、孔の断面に段がついている。なお、図版に幾つかの突起や貼付例を載せた。

C群土器のまとめ

ここまで遺物の説明を行ってきたが、このC群土器はその内容、量とも豊富なものであり、図示されなかった資料も多い。それらを含めて、いくつかの項目についてまとめを行いたい。

1) 器 形

大きくは鉢形土器と器体に明瞭な屈曲をもつ壺形土器・注口土器とがある。鉢形土器には、口径が器高を上回るか、あるいはほぼ等しい大小の鉢と口径が器高の2倍近い数値を示す浅鉢とがある。大型の鉢には、装飾性の高いものがある。上半部に文様帶をもち、下半部に無文面をもつものがそれで、これらは文様帶を境にプロポーションの流れに変化が認められる。下半の無文面は飾みをもちつつすばまり、上半の文様帶では直立(27)ないしは外傾(28~30)して立ちあがる。装飾性の低い土器では、あまりこのような立ちあがりの変化は認められない。大

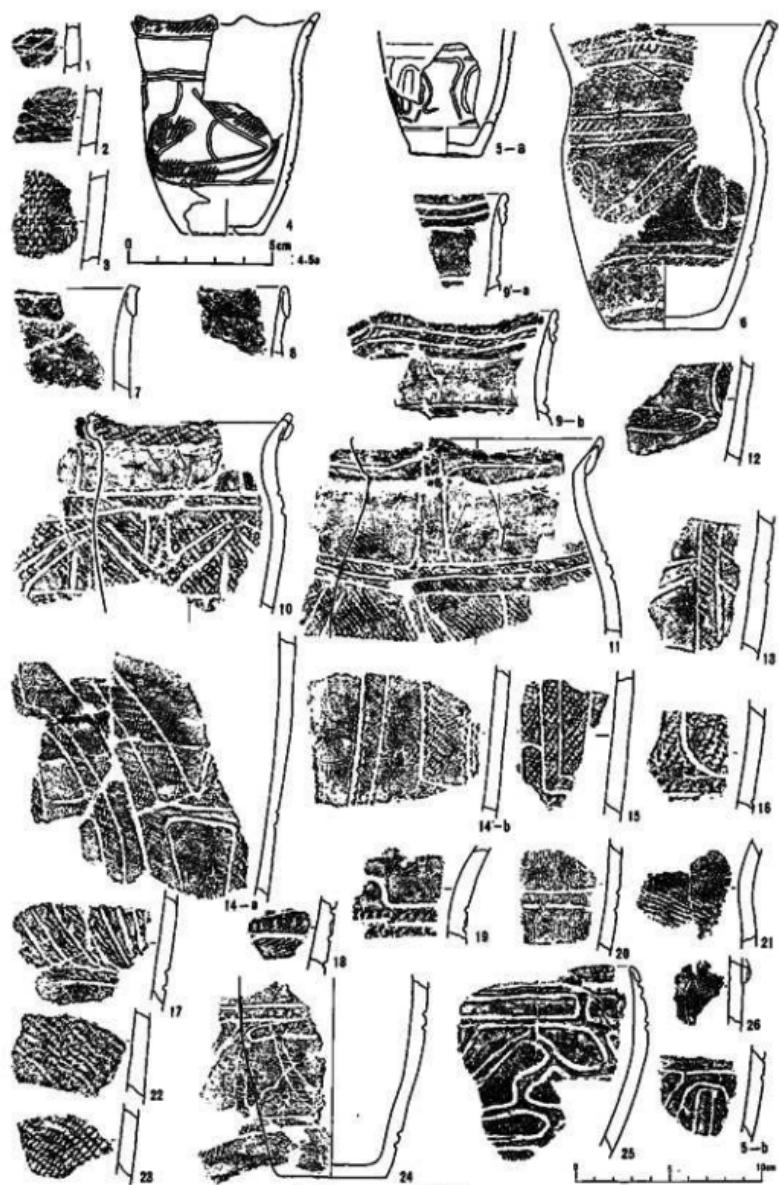


圖 7 A · B 群土器



図 8 C 群土器(I)

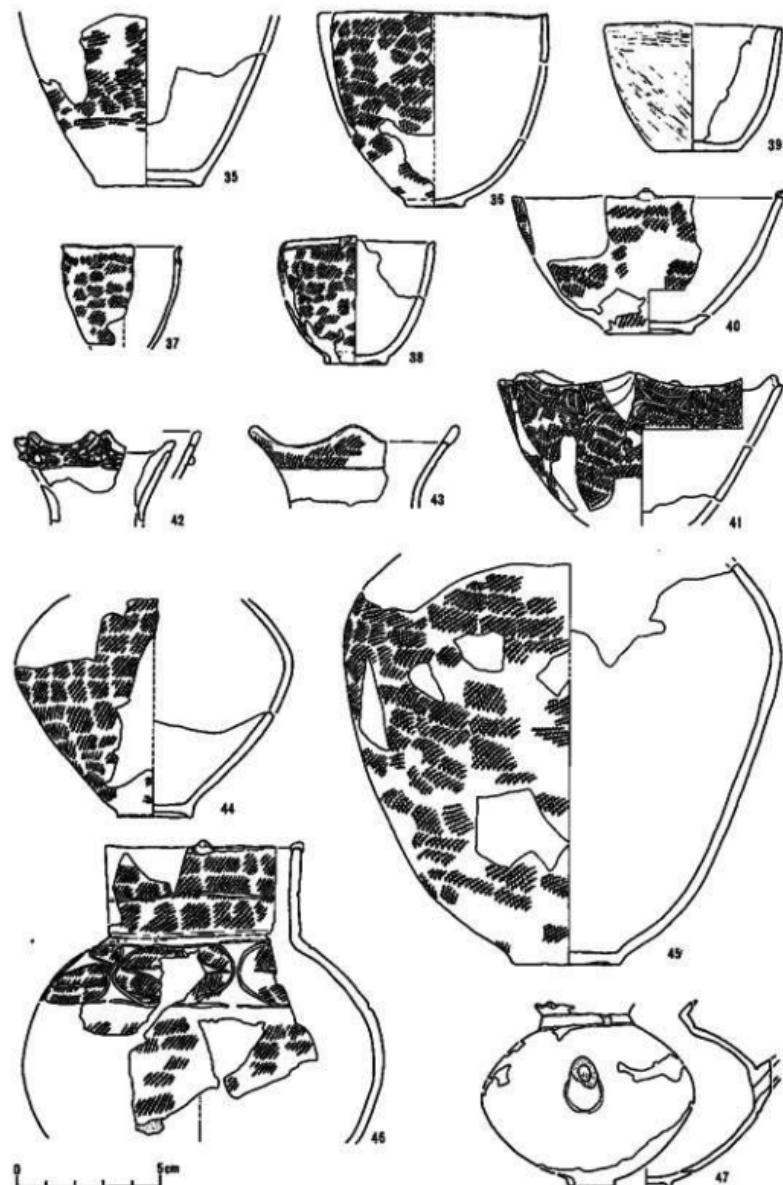


図 9 C 群土器(2)

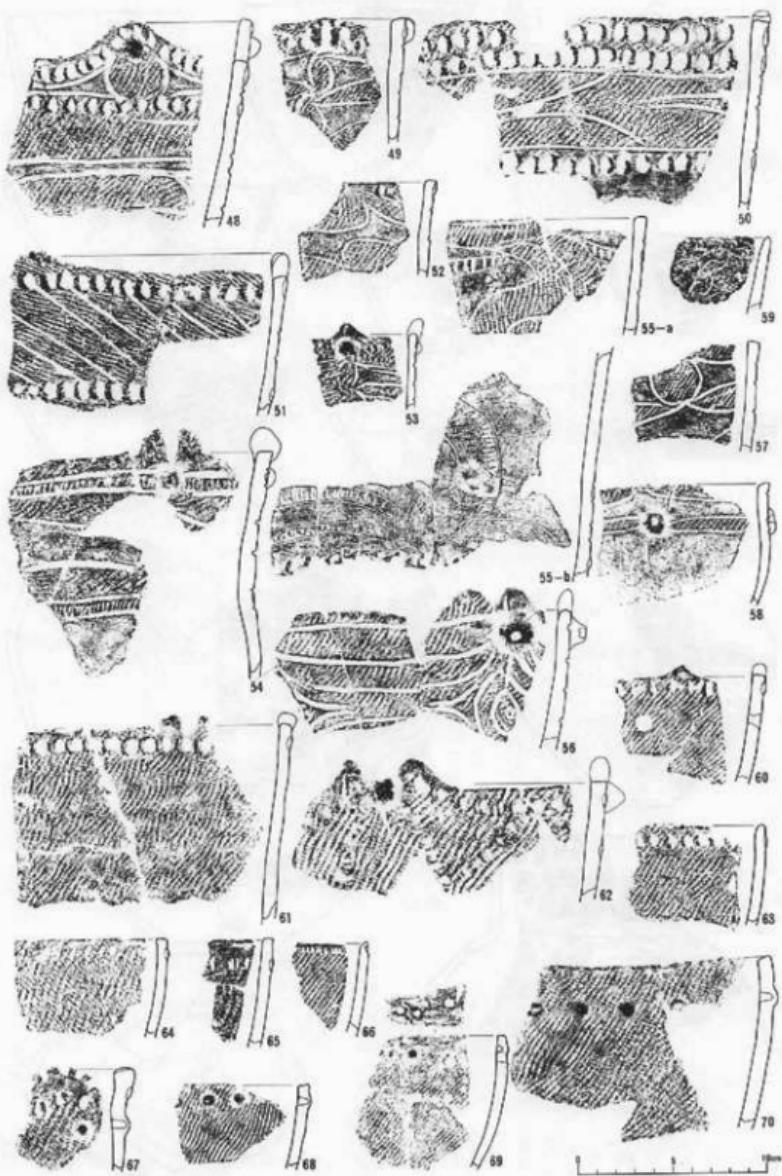


図10 C群土器(3)

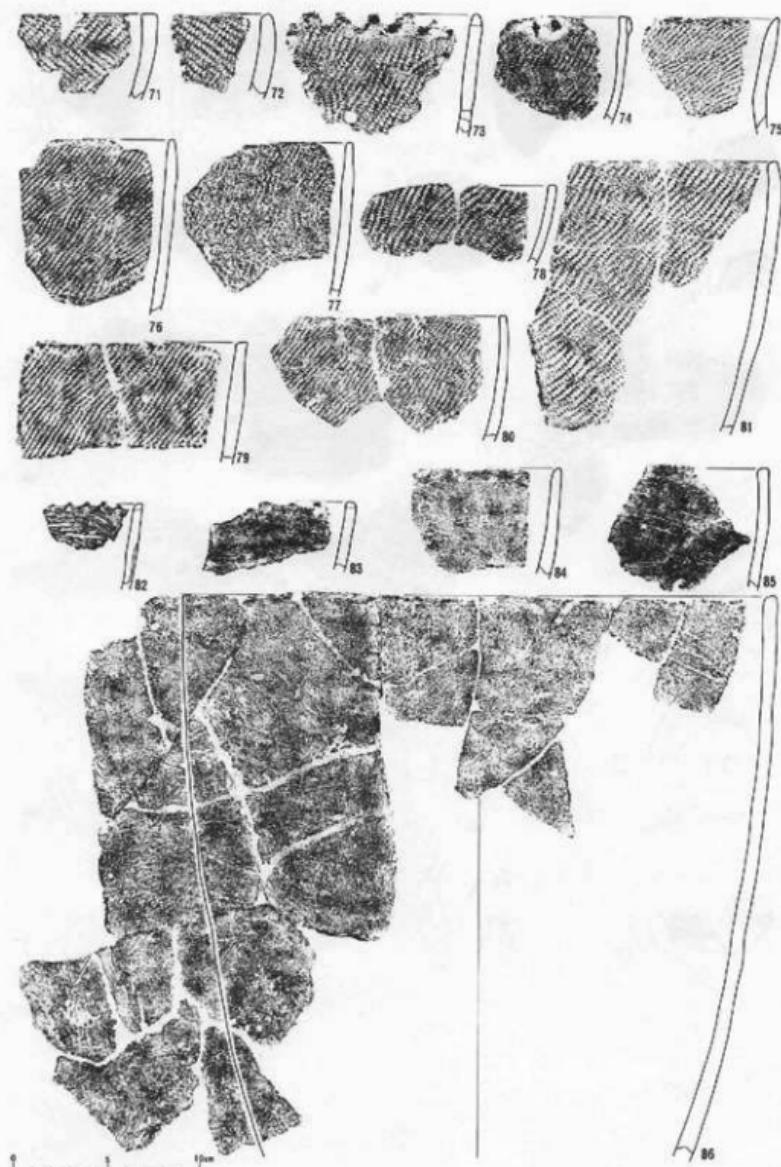


图11 C群土器(4)

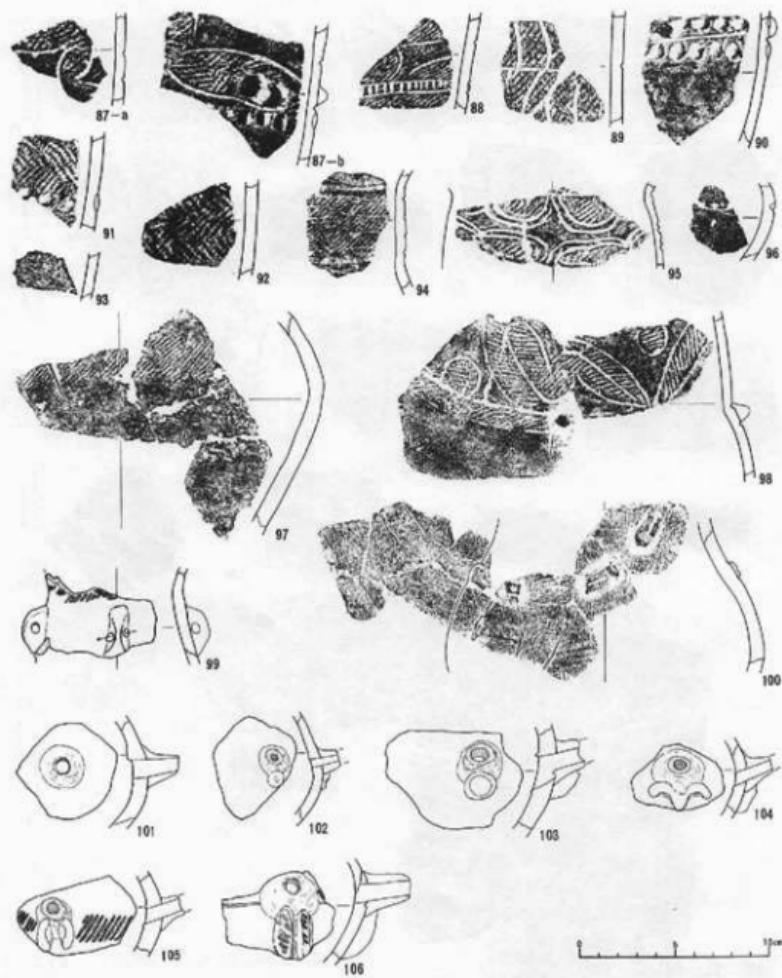


図12 C群土器(5)

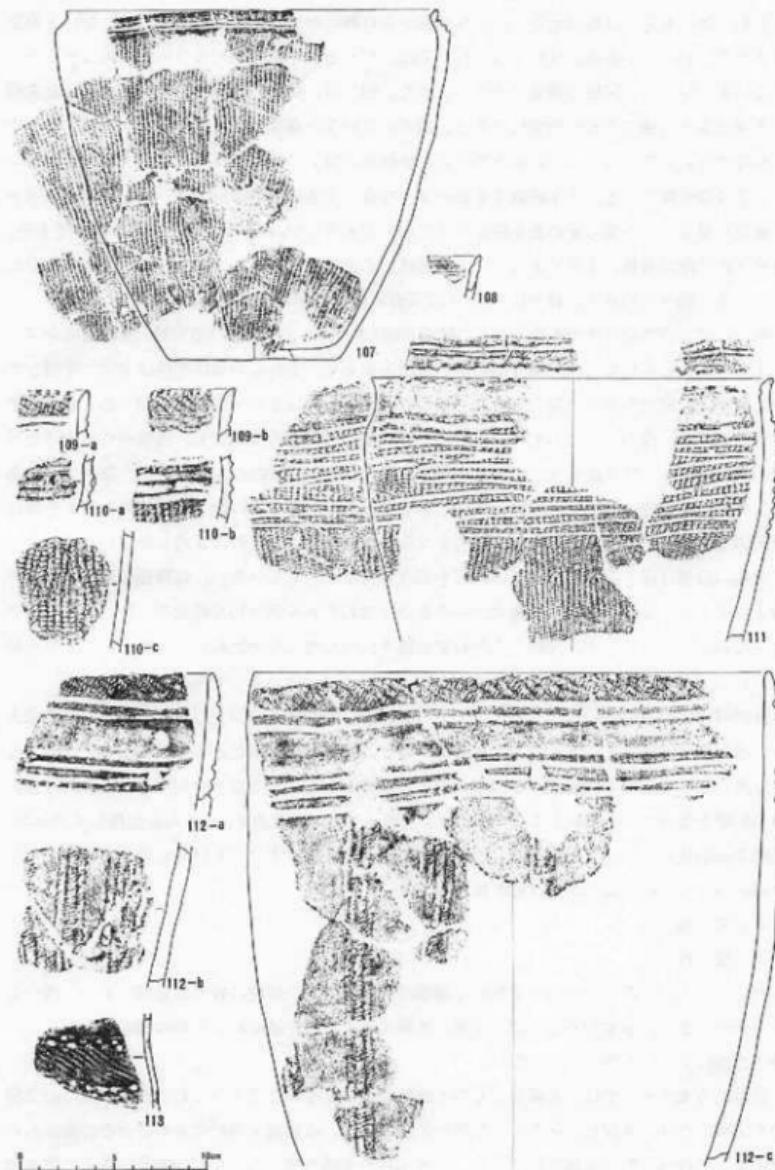


図13 D·E群土器

小はあるが、楕状を基本とするようである。

壺形土器、あるいは注口土器では、屈曲部から口縁にかけて外反するもの(42, 43)と直立するもの(46)がある。注口土器(47)では内傾する狭い頸部が形成され、口縁は逆に外傾している。94なども同種の頸部であろう。また、98には、先述した鉢形土器に認められた文様帯と無文面との境での器形の変化がある。図示していない破片では、屈曲したり内傾したりする破片はきわめて少なく、それ以外のものが中程度のコンテナ5箱に対して、A4版大のビニール袋3袋程度である。下半部破片や46のような直立する口縁部破片では、鉢形土器との違いを分別し得なかった事もその差を際立たせているであろうが、鉢形土器の多い事は確かである。復原された注口土器は1点であるが、注口部は18点出土している。このうち3点は箇の部分だけである。残りの15点中、47や101のように下部に貼付のないものは2点のみである。

他にはほぼ実数の明らかなものでは、口縁部が667点出土している。口唇形態には、丸味を帯びた山形のものと平坦なもの、切り出し状のものがある。これらの量的関係は充分に把握していないが、比較的厚手で大型のものに平坦なものやあるいはそれが内傾して切り出し状を呈するものが多く、薄手で小型のものに山形のものが多い。山形のものでも、内側がややそげた状態のものがあり、切り出し状のものとの関連が窺われる。例外的なものとして、71の土器がある。口唇部が厚ぼったく、古い様相を残したものと考えられる。口縁では平縁のものとそれに突起の加わるものが多く、73・82・83のような小波状を呈するものは5点しかない。

突起の形態は図と図版の中でその内容を紹介し得たと考えているが、口縁部破片から傾向の窺える点を挙げる。縦文のみ、無文のみのもので突起のある例は15%程度で、特に無文のものに少ない。これに対して、沈線や爪形刺突の施されたものには半数前後、突起のあるものが確認される。また大型の土器が多く、中~小型の土器には少ないようである。

底部破片は約150点得られている。このうち100点以上が底面の半分以上を欠損したものである。底面のほぼ残っているもので大きさをみると、直径6cmを超えるもの7点、4~6cmのもの5点、2~4cmのもの12点、2cm未満のもの2点となる。小さなものが多いが、これらは欠損の影響を受けづらい事にもよるのだろう。平底のものが4点ある。いずれも欠損しているが、直径7cm前後のものと5cm前後のものが2点づつある。他はすべて上げ底を呈し、傾向としては怪の小さなもののはうが上げ底の程度が大きい。

ii) 文 様

① 沈 線

細・太あるいは深・浅について明瞭な指摘は行えないが、B群に較べると細いものや浅いものは多い。また、59や93のように無文面に沈線のみで文様が描かれるものは細い。ただしこの種の土器は3点しか得られていない。

描かれるモチーフでは、直線的なものと弧状を呈するものとに大きくわかれ、前者には文様帯を区画したり、多段化させるものが多い。後者では、突起間を連結するものやその組みあわせによって長横円形の文様を描くもの、三叉文状の文様を描くものなどがある。さらにすり消

し縄文手法を行う事で、S字状や木の葉状の文様を描くものもある。このすり消し手法の加えられたものは、大型の鉢や壺、あるいは注口土器にしか認められない。

② 円形刺突文

破片ではめくれを残すものが約400点、めくれの認められないものが40点で、前者が圧倒的に多い。めくれが左右どちらに残っているかは、特に片寄りが認められない。ひとつの土器の中に、右に残るものと左に残るものとの両者が認められる事もある。配列では平行にめぐるものと突起を意識して弧状にめぐるものがある。めくれのないものもほぼ同様であるが、沈線の間に施されるものが多くなり、29や55のように弧状に並ぶものもある。62にみられるめくれを残して弧状に垂下するものや96のように円形を呈する刺突は、例外的なものである。

③ 突瘤文

24点得られているが、同一個体と思われる破片もあり、10個体程度と思われる。口唇は山形のもの、平坦なもの、切りだし状のものがほぼ同数ある。小波状の口縁をもつものは1点のみである。67のように爪形刺突とともに施されるものは2個程度で、突起がついている。突瘤だけの土器破片に突起の認められる例はない。

④ 縄文・無文

縄文のみが認められる破片は、全破片数の1/3程を占めている。L R原体を使用した斜行縄文がほとんどである。R L原体を使用したものは、30や51の他に55点の破片があるが、ごく少數といえる。羽状縄文を呈するものは12点で、同一原体によるものと異なった燃りの原体によるものがある。結束による羽状縄文はない。文様帶内に羽状縄文の施されるものは57にあるが、きわめて稀なものである。

無文の破片も縄文のみのものとほぼ同量で、全破片数の1/3程度ある。

⑤ 貼付

貼瘤ともいわれるもので、後期後葉に隆盛する文様のひとつである。全例を調べてはいないが、図示されたものから読みとれるように、突起直下と文様帶の区画部につけられる事が多い。区画部につけられるものも、突起との対応関係が強い。形状では、円形のものと橢円形のものとに大きく分かれ、さらに刻みや刺突のつくものや2個1組でつけられるものなどの種類がある。

iii) 汚　れ

遺物の説明の中でしばしば触れた汚れについて補足しておく。ここで“汚れた”と表現した土器は、炭化物の付着したものや炭を吸って黒一茶褐色を呈したと思われるものである。これらは主に煮沸に関連する汚れと考えている。その意味での汚れた土器は、鉢形の節られない土器に多い。また、これらの土器は胎土に砂の混入の多い為か、表面にザラツキが感じられる。これに対して装飾性の高い土器や壺形土器、注口土器は、黄褐色や赤褐色を呈して汚れが少ない。表面のザラツキが感じられる土器も少ない。例外的なものとして45の壺があるが、この土器には補修孔の穿たれている事が注意される。

iv) C群土器のまとまり

前段まで本群の内容を述べてきたが、ここでC群土器のまとまりについて触れる。

おそらく本群土器は、その使用目的によって器形や文様、あるいは文様帯がある程度限定されていると思われるが、器形は違っても同じ文様要素をもつもの、文様は違っても同じ器形をもつものなど、器種の違いの中にも特徴の重複する部分が見出される。この事は本群土器が時間的に大きな幅をもたないものである事を示すと思われる。また、本群は他のA・B・D・E群と比較的容易に識別される。B群とは共通の文様要素をもつ為、89や99のようにその所属に迷う資料もある。しかし、大半のB群土器はC群より厚く、胎土に砂の混入が多い。また、6や12のように木の葉状のモチーフをもつ土器が存在するが、それはC群のように弧線に向かわせたものではなく、木の葉状にくくられたものであろう。A・D・E群とは、地文や文様の組合せ、器形などに違いが認められる。これらの点で、本群とA・B・D・E群との混同は極めて少ないといえる。

こうした事から本群は、比較的時間幅の限定された土器群を示す良好な資料といえよう。^{註1)}また、昭和58年度の調査（北埋文 1985）において出土した遺物も本群に含まれるものである。

D 群（図13-107, 108）

107は鉢形土器である。口縁部には3本の沈線がめぐり、最上位の沈線の中に刺突が加えられている。口縁内側には、浅い沈線による段がついている。108は口縁部小破片で、磨かれた無文面上に2本の沈線がある。内面には段がついているが、107ほど明瞭ではない。

E 群（図13-109～113）

109は、刻みのつけられた口縁部破片である。110には、沈線の中に小さな盛り上りが認められ、沈線が1部切られた状態になっている。aの上位には、無文帯が認められる。111は、口唇に刻みがあり、内面に沈線がひかれている。器体を平行にめぐる沈線の中には、横U字に閉塞した変形工字文風の部分がある。E群の中では、古いものであろう。112には、口唇の刻みはない。上位に2条、下位に3条の平行沈線があり、その間は無文帯となっているが、頭部は形成されていない。下位の文様帯には、沈線上を搔いて沈線を切ったところがあり、110と類似する手法である。113は、極めて薄手に造られた土器で、弥生式系のものと思われる。2例の刺突列が上下にあり、その間に斜行縞文が施されている。刺突列の上位は、無文帯になっている。

註1) 馬場瀬遺跡（青森県教委 1981）報文の中に類例があるが^a（図49-4・5、図60-4等）、いずれも把手は1個のようである。

註2) 58年度の調査報告では、爪形文のある土器を縞文時代晩期初頭（V-a）と考えているが本群と同じく後期末葉のものであろう。59年度は調査地点がいくぶん離れているため、円筒土器下層式が出土している。この中で根川式土器に類似するとしたものは、同報告書の湯の里2遺跡出土遺物と同種のものであり、サイベ沢I・II式に相当するものと思われる。ここで訂正しておきたい。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会：『馬場瀬遺跡発掘調査報告書』(1981)
 安孫子 昭二：「東北地方における縄文後期後半の土器様式」『石器時代9』(1969)
 安孫子 昭二：「瘤付土器(新地式)」『縄文文化の研究4』(1981)
 石本 省三：「北海道南部の続縄文化」『北海道の研究1』(1984)
 今井 富士雄・磯崎 正彦：「十勝内遺跡」『岩木山』(1968)
 西連寺 雄：『松前町原口遺跡発掘調査報告書』(1976)
 高橋 正勝：「知内町渋元遺跡出土の土器と北海道西南部の縄文時代後期後半について」『北海道の文化29』(1974)
 北海道埋蔵文化財センター：『湯の里遺跡群』(1985)
 森田 知忠：「北海道」『縄文土器大成3』(1981)
 吉崎 昌一：「縄文文化の発展と地域性 北海道」『日本の考古学II』(1965)

表1 図掲載土器一覧

番号	分類	出土区	番号	分類	出土区	番号	分類	出土区	番号	分類	出土区
1	A	J-73-a	29	C	J-73-a	59	C	I-74-b	89	C	J-73-b
2	"	J-73-b	30	"	J-72-c	60	"	I-72-c	90	"	I-74-b
3	"	I-74-b	31	"	I-72-c	61	"	I-72-c	91	"	I-73-c
4	B	J-73-a	32	"	J-73-b-I-74-b	62	"	I-74-b	92	"	I-72-c
5-a	"	J-72-a-d	33	"	I-72-c	63	"	I-72-c	93	"	"
"	"	J-72-a	34	"	J-72-c	64	"	I-73-c	94	"	"
6	"	J-74-b	35	"	J-74-a	65	"	J-73-c	95	"	"
7	"	I-73-b	36	"	I-72-c	66	"	J-74-b	96	"	I-74-b
8	"	J-72-a	37	"	J-72-a	67	"	I-72-c	97	"	I-74-c
9-a	"	J-73-a	38	"	I-72-c	68	"	"	98	"	J-72-a
"	"	"	39	"	J-72-c	69	"	J-73-b	99	"	J-72-d
10	"	I-73-b	40	"	J-72-c	70	"	I-74-b	100	"	I-73-c
11	"	J-73-b	41	"	J-72-a-d	71	"	"	101	"	J-73-a
12	"	I-73-b	42	"	I-72-c	72	"	I-74-c	102	"	J-72-a
13	"	"	43	"	"	73	"	I-74-b	103	"	J-72-d
14-a	"	J-73-b	44	"	J-72-d	74	"	J-72-b	104	"	J-72-c
"	"	I-72-c	45	"	I-72-c	75	"	I-74-b	105	"	J-73-c
15	"	J-72-c	46	"	J-72-a	76	"	I-72-c	106	"	I-72-c
16	"	"	47	"	I-74-b	77	"	"	107	D	J-72-b
17	"	J-73-a	48	"	I-72-C	78	"	J-72-a	108	"	J-74-a
18	"	J-72-d	49	"	"	79	"	I-73-b	109-a	E	I-72-c
19	"	I-73-b	50	"	I-74-b	80	"	I-72-c	-b	"	"
20	"	I-72-b	51	"	"	81	"	"	109-a	"	"
21	"	I-74-b	52	"	J-74-a	82	"	"	-b	"	J-72-a
22	"	I-72-c	53	"	I-72-c	83	"	"	-c	"	"
23	"	"	54	"	I-74-b	84	"	J-73-c	110	"	I-72-c
24	"	J-72-a	55-a	"	I-74-c	85	"	I-74-c	110-a	"	J-72-d
25	"	J-73-c	-b	"	I-74-b	86	"	I-72-c	-b	"	"
26	"	I-73-b	56	"	K-72-b	87-a	"	"	-c	"	"
27	C	I-72-c	57	"	I-74-b	-b	"	I-73-b	113	"	I-72-b
28	"	J-72-d	58	"	"	88	"	I-74-b	"	"	"

(2) 石器

石器類は総計10,229点出土している。その内訳は、剥片石器243点、礫石器72点、石核64点、剥片・石屑7,916点、礫・礫片1,473点および旧石器時代の剥片・石屑461点である。

石錐（1～38）

50点出土している。無茎錐ではなく、すべて有茎錐・菱形錐で、有茎錐も基部が突出する凸基のものである。石材は頁岩もしくは珪質頁岩が44点、黒曜石3点（1・14・29）、めのう3点（2・3・5）である。

石錐（39～62）

36点出土しており、その石材はすべて頁岩もしくは珪質頁岩である。39～42は棒状をなすもの、43～45は調整加工による明瞭なつまみ部をもつもの、48～62は一応つまみ部をもつが、素材（剥片）の形状をほとんど変えていないものである。

槍先もしくは両面加工のナイフ（63～67）

6点出土。石材はすべて頁岩もしくは珪質頁岩である。63は有茎のもので、尖頭部からカエシにかけての縁辺にアスファルトが付着している。66は打面の厚さを削除することができず、大きさに比べて厚手である。

つまみ付ナイフ（68～92）

48点出土。つまみ部作出のノッチ加工部を水平にして次の三つに分けられる。刃部が下端（底辺）にあるものを横形、刃部が斜めになり、つまみからの垂線に対して左右非対称の形状となるものを斜形、刃部がどうあれほぼ対称形をなすものを縦形とする。横形（68～73）は6点、斜形（74～81）は10点、縦形（82～92）は32点出土している。石材は頁岩もしくは珪質頁岩であるが、68・88のように淡緑色を呈するめのう質珪質頁岩もある。

ナイフ・スクレイパー類（93～125）

103点出土。石材は図示した105・106の2点が黒曜石で、あとはすべて頁岩もしくは珪質頁岩である。93～95はエンドスクレイパーで、とくに93は石箋と称されるものである。96・97は抉り込みのあるもの（notched）、105・106は鋸歯状の刃部をもつもの（denticulate）、107・108は尖頭部をもつもの（convergent）である。総じて、素材である剥片の形状をほとんど変えることなく、片面に周辺加工を施して刃部を作出しているものが多い。

石核（126～133）

64点出土しており、石材はすべて頁岩もしくは珪質頁岩である。

磨製石斧（134～143）

碎片・薄片を含めて27点出土している。134～137は磨きによる整形、138は打欠きによる整形、139～143には敲打痕（pecking）が認められる。石材は緑色泥岩がもっとも多く、緑色片岩（138ほか2点）、緑色砂岩（142の1点）、泥岩（134の1点）である。

石錐（144・145）

2点出土しており、石材は砂岩である。

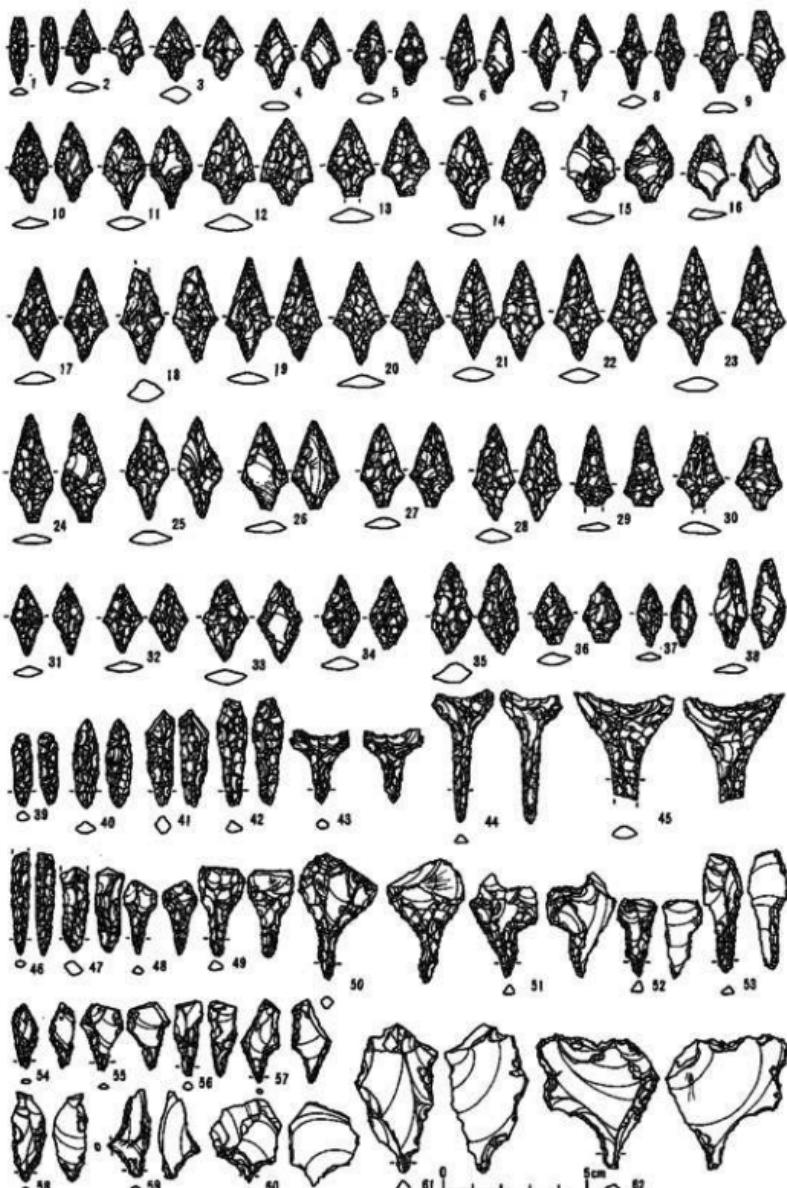


図14 石器(1)

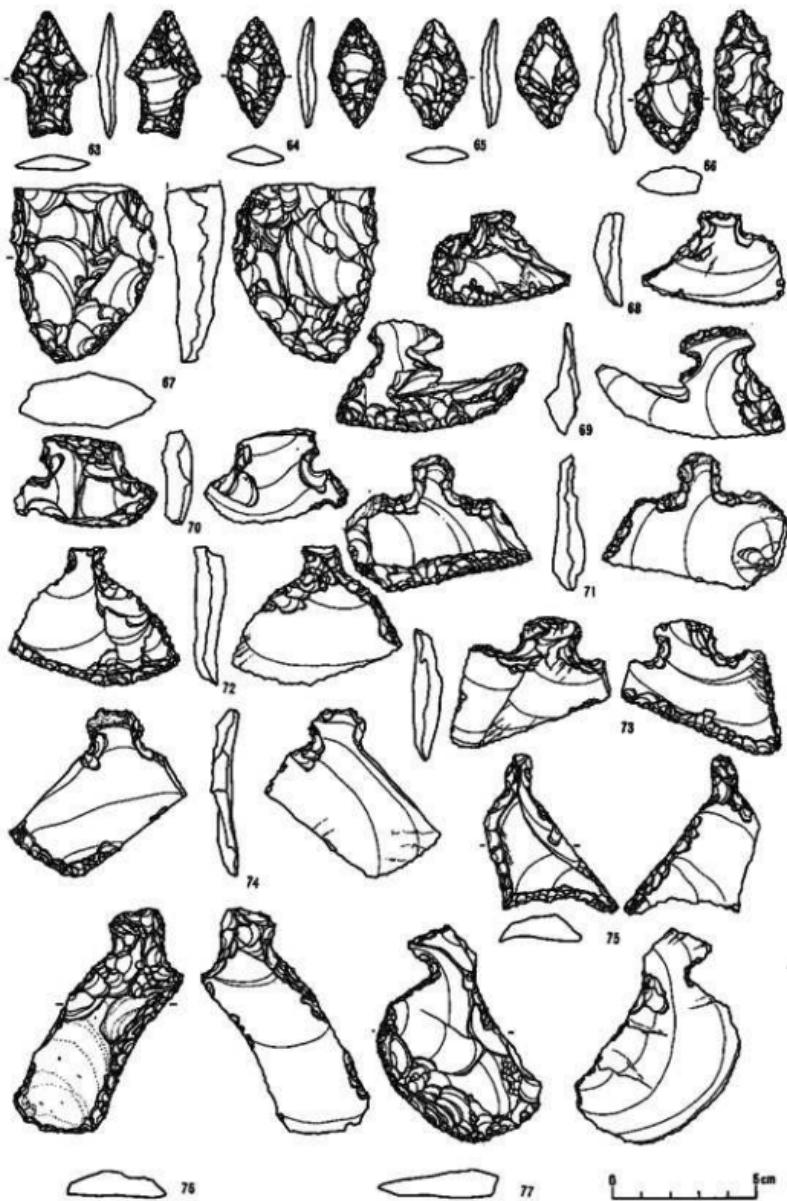


図15 石 器 (2)



圖16 石 器 (3)

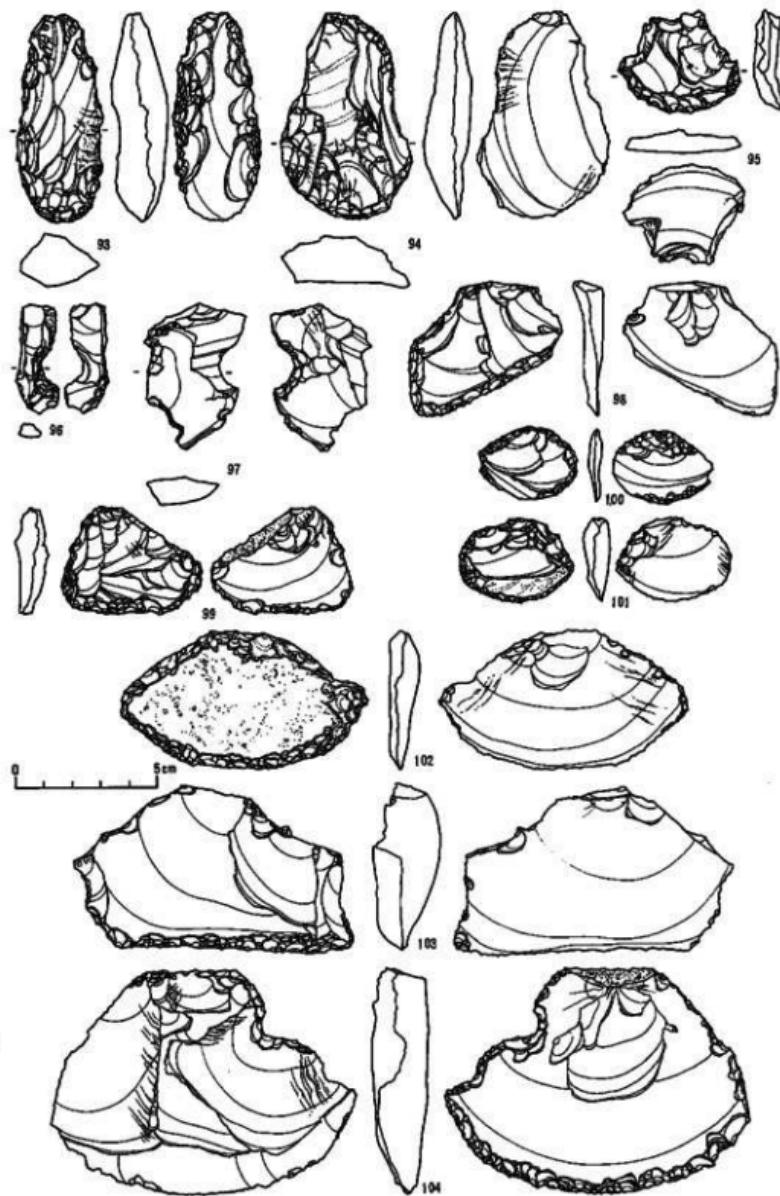


図17 石器(4)

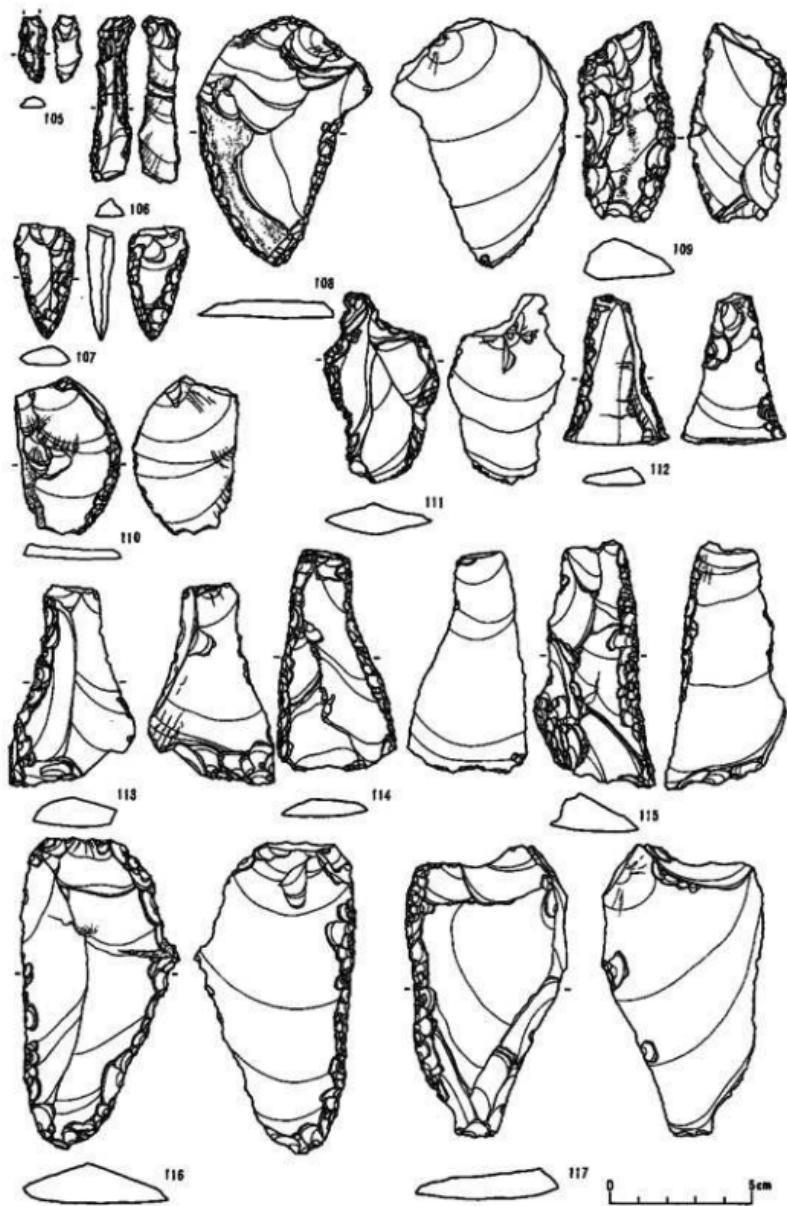


圖18 石 器 (5)

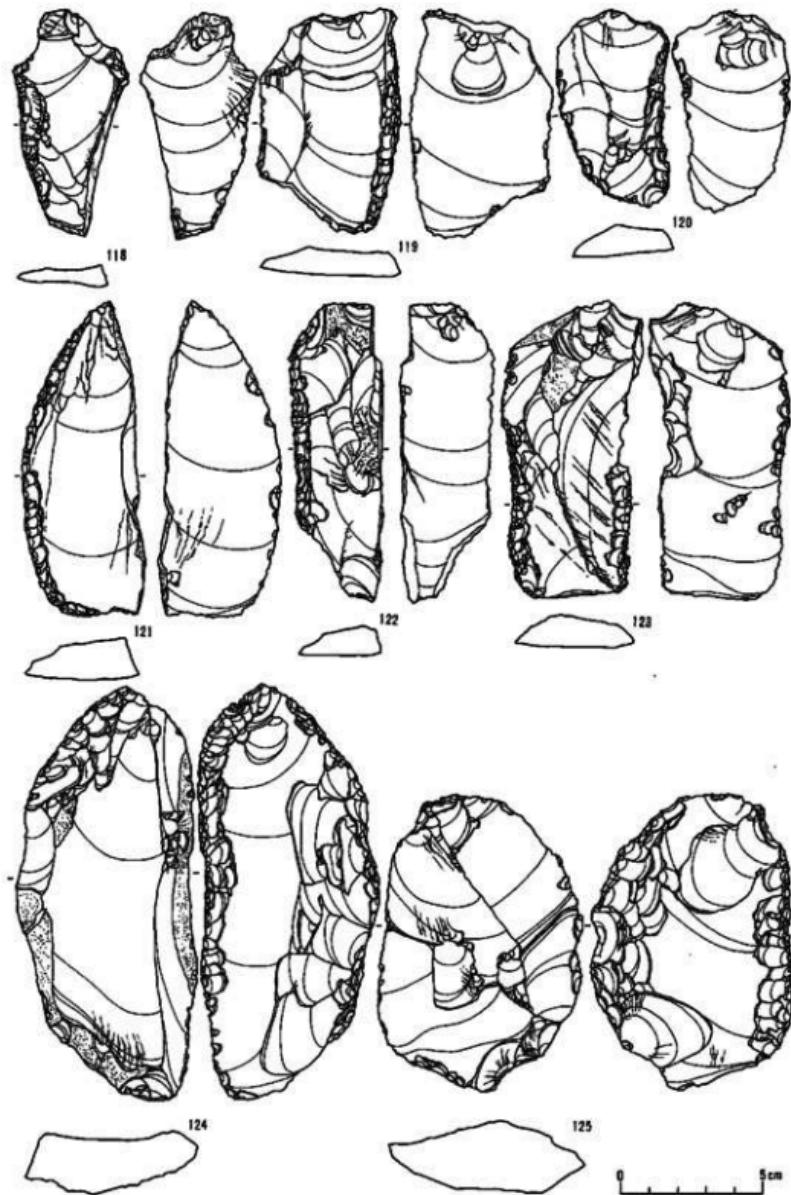


圖19 石 器 (6)

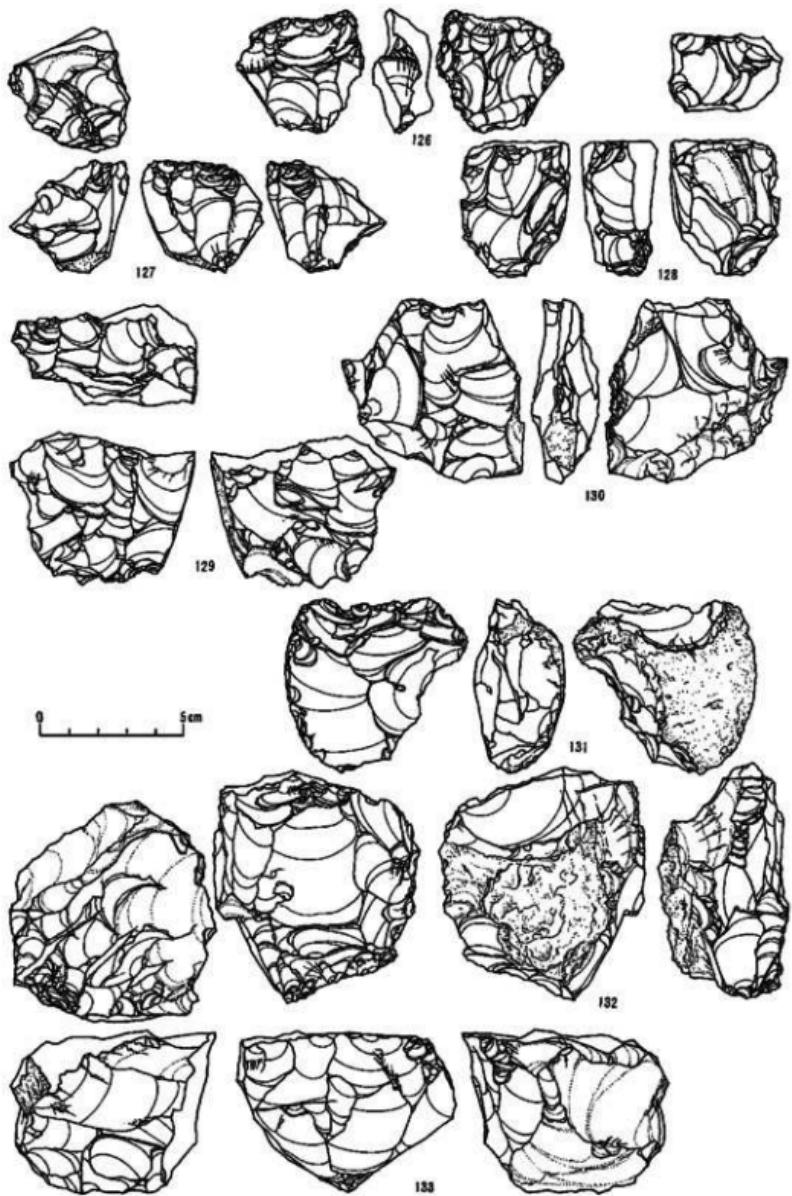


図20 石 器 (7)

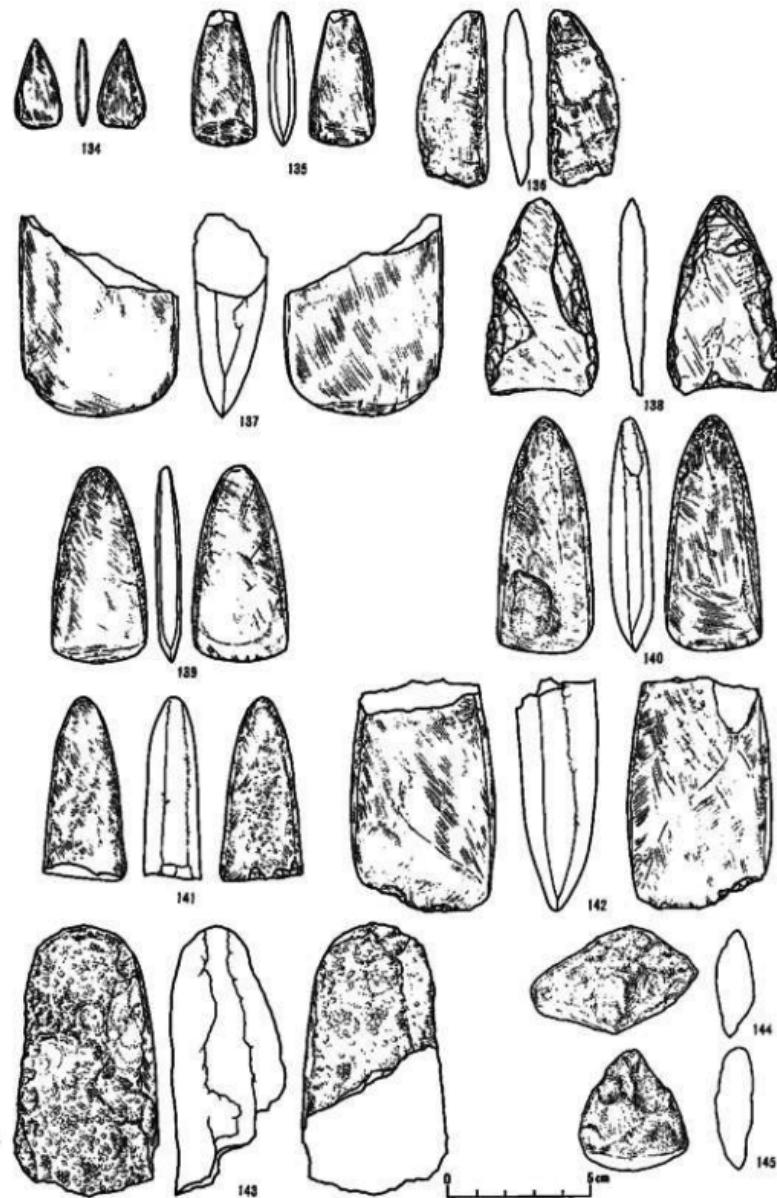


圖21 石 器 (8)

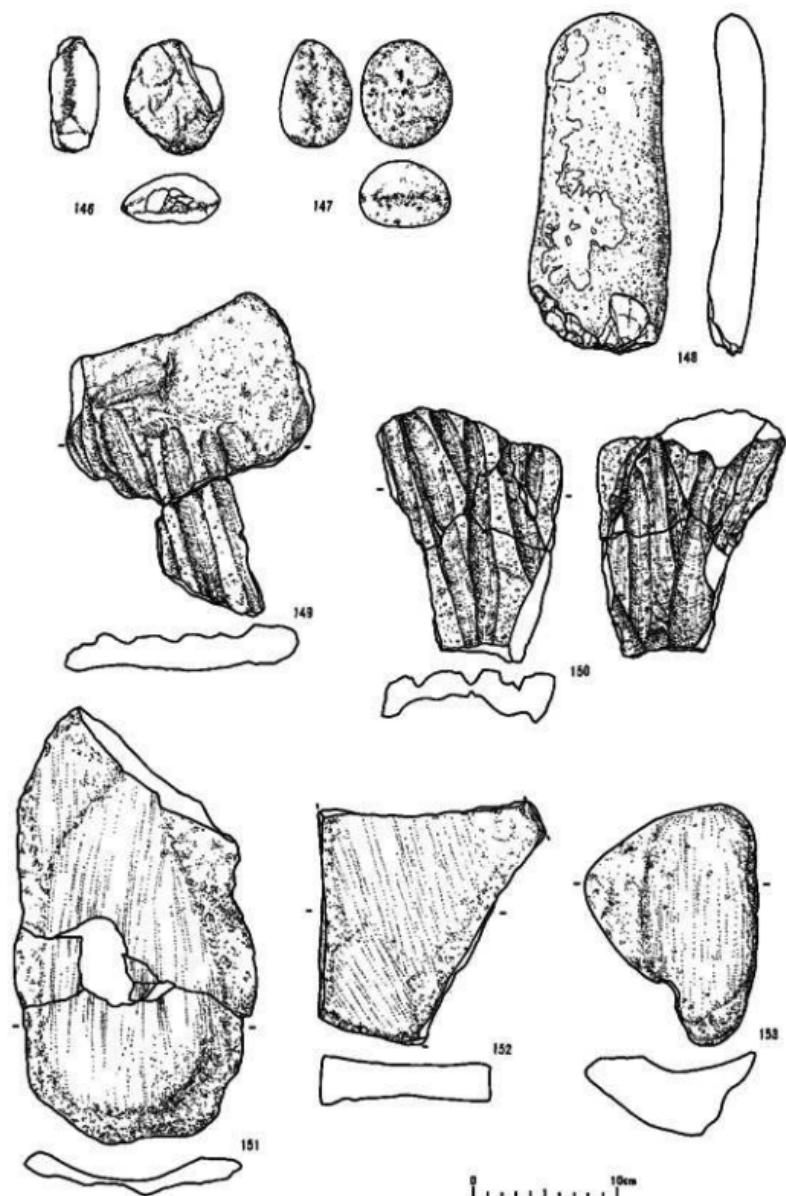


図22 石 器 (9)

たたき石 (146~148)

7点出土。146・147は円礫の側縁のほぼ全周に使用痕がある。148は長円扁平礫の長軸の一端に使用部位が認められる。石材は146が泥岩、147が安山岩、148は砂岩である。

砥 石 (149~153)

破片を含めて36点出土しているが、接合関係から個体数は最高で23点で、その石材はすべて砂岩である。149・150は5~6条の溝を有する砥石で、いわゆる玉砥石であろうか。

剝片・石屑

縄文・統縄文時代に属するものは7,916点出土しており、このうち二次加工ある剝片(retouched flake)は73点、刃こぼれ状の使用痕ある剝片(utilized flake)は20点である。

礫・礫片

1,473点出土しており、このなかには礫石器の破片・碎片の可能性があるものおよび明瞭な使用痕はないが有意と考えられる礫・礫片が171点、焼けた礫18点が含まれている。

(3) 漆塗製品 (口絵カラー)

3点出土しており(図5)、1と3は朱漆塗の櫛である。2は朱漆の残片で原形をとどめていないが、他の2例からみて櫛の可能性が高い。1はJ-72-d区、2・3はI-72-c区から出土。

(4) 石製品 (154・155・158)

3点出土している。154・155はかんらん岩製の玉。158は一面の上下に一孔ずつあり、さらに下位の孔と直交する一孔がある。側面には沈刻線が施されており、垂飾品であろうか。石材は泥岩である。

(5) 土製品 (156・157・159~169)

破片を含めて29点出土しているが、個体数は21点である。その内訳は、玉2点、土偶1点、垂飾・装飾品3点、土版2点、耳飾13点である。

156・157は玉で、156は石組炉の焼土中から出土。

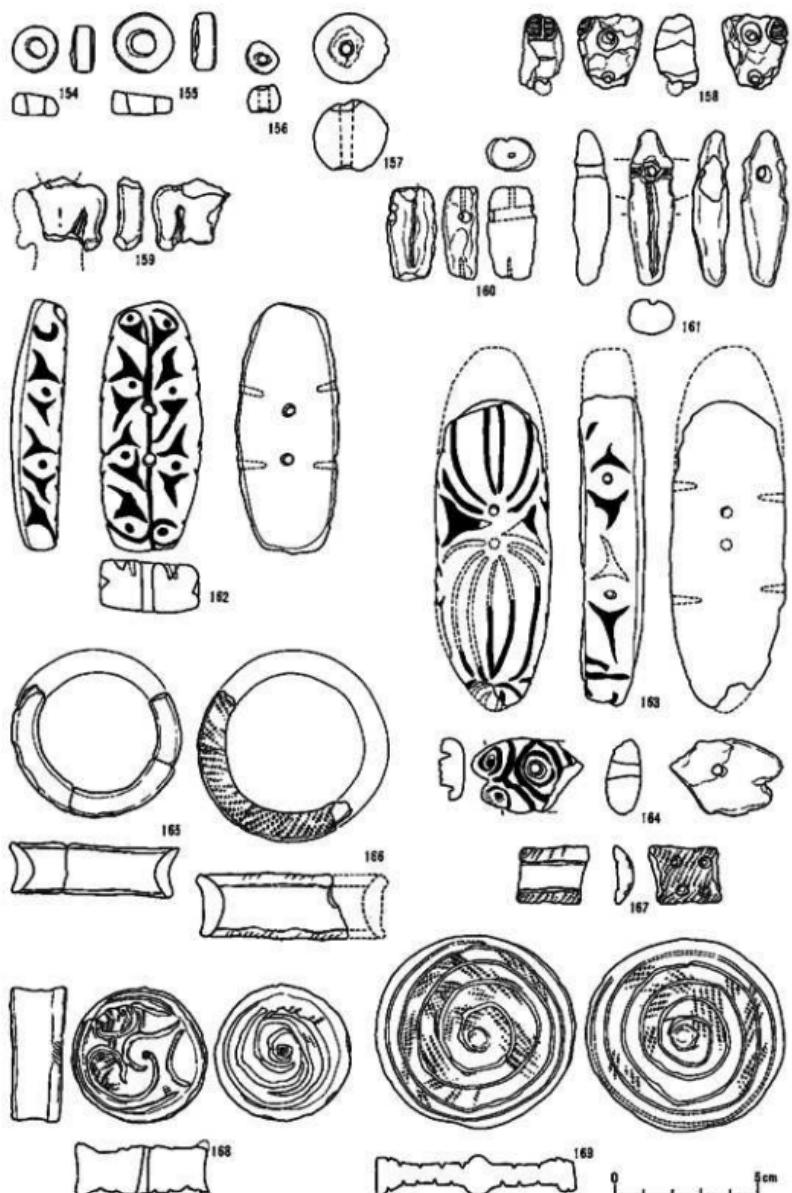
159は土偶の一部である。

160・161・164は垂飾品もしくは装飾品で、161は両側を欠損しているが、十字懸垂状のものである。

162・163は精円形の土版である。162は二つの貫通孔を通る正中線が施され、表面・側面に三叉文が配されている。163は表面中央に三叉文、その両側に連弧状文が施されており、側面にも三叉文が施されている。二例とも中央部の孔が対をなしていること、一面には文様がないことからみて、装飾品の可能性がある。

165~169は耳飾である。168は中央に貫通孔があり、一面に巴状の入組沈線文、他面に渦状文が施されている。両面に赤色塗彩の痕跡が認められる。169は両面とも中央に瘤状の小突起があり、渦巻文が施されている。

(註) 朱は赤色をあらわし、水銀朱を意味するものではない。

図23 石製品・土製品 (154~157は $\frac{1}{2}$)

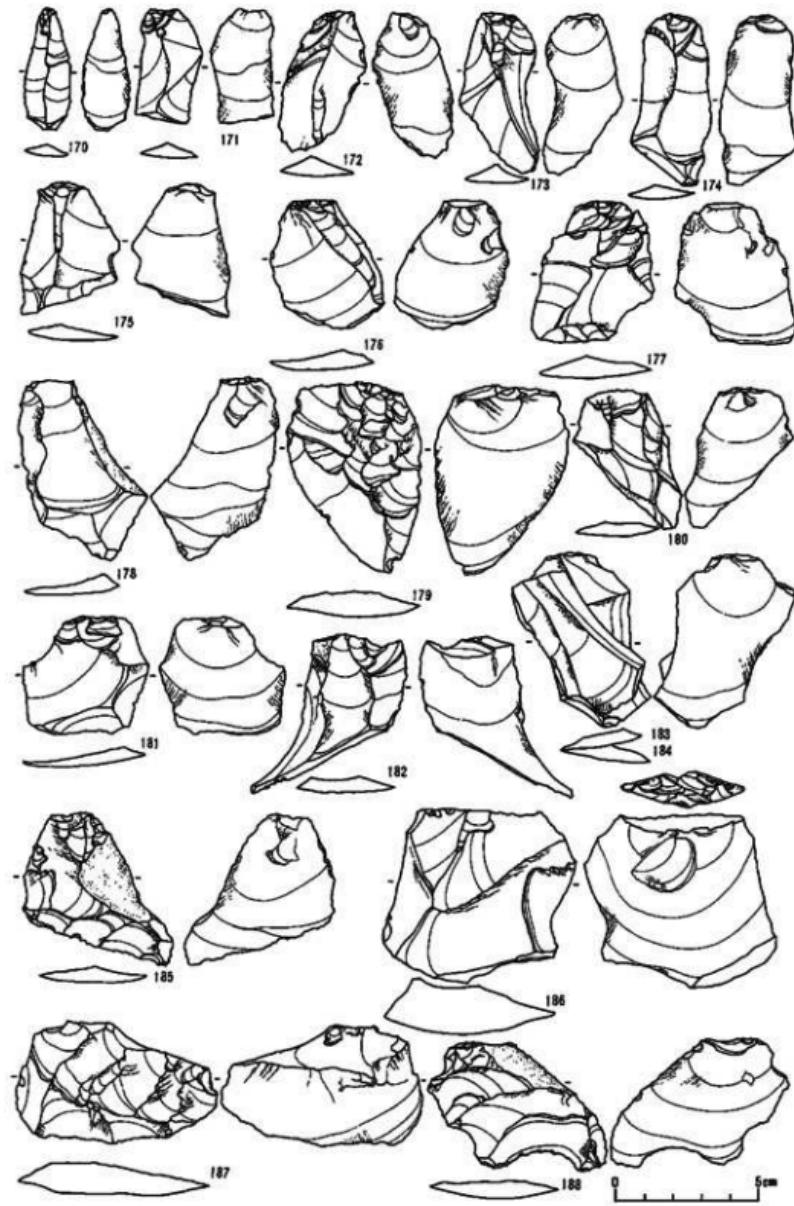


図24 旧石器時代の遺物

(6) 旧石器時代の遺物 (170~188)

I-73-c 区から J-73-d 区にかけての径約 2 m の範囲から、旧石器時代の遺物が出土している。出土層位は IV 層下部から V 層上部である。出土点数は 461 点で、すべて頁岩もしくは珪質頁岩の剝片・石屑であり、tool は出土していない。

(7) その他

自然遺物として、I-74-b 区から焼けた陸獣骨片（種名不明）が 1 点、I-72-c 区および I-74-a 区からオニグルミの堅果がそれぞれ 2 点・1 点計 3 点出土している。

表 2 図掲載石器一覧(1)

番号	種別	出土区	重量	番号	種別	出土区	重量	番号	種別	出土区	重量
1	石 錐	J-73-a	0.2	29	石 錐	I-74-b	0.8	57	石 錐	I-73-b	1.3
2	"	J-73-b	0.6	30	"	I-74-a	1.2	58	"	I-72-c	1.4
3	"	J-74-a	1.1	31	"	I-72-c	0.6	59	"	J-72-a	1.7
4	"	I-72-c	0.7	32	"	I-74-a	0.7	60	"	I-74-c	1.9
5	"	J-73-b	0.7	33	"	I-73-c	1.4	61	"	J-74-a	8.8
6	"	I-74-b	0.5	34	"	I-74-b	1.2	62	"	I-73-b	10.4
7	"	"	0.7	35	"	I-72-c	2.4	63	ガイントナ	J-72-b	5.1
8	"	"	0.6	36	"	"	1.0	64	"	I-74-b	3.7
9	"	I-74-c	0.9	37	"	I-74-b	0.5	65	"	"	3.9
10	"	I-74-b	1.1	38	"	I-74-c	0.9	66	"	J-74-a	9.0
11	"	I-74-c	1.5	39	石 錐	"	0.7	67	"	J-72-b	58.8
12	"	I-74-b	2.0	40	"	I-72-c	1.5	68	アマミサ	I-72-c	10.1
13	"	I-74-c	1.4	41	"	I-74-a	2.3	69	"	"	12.4
14	"	J-74-a	1.6	42	"	I-74-b	2.4	70	"	"	12.4
15	"	J-72-a	1.4	43	"	J-74-a	5.0	71	"	I-73-b	23.8
16	"	I-74-c	0.9	44	"	J-72-d	2.0	72	"	I-72-c	16.7
17	"	I-74-b	1.0	45	"	I-73-c	1.4	73	"	J-72-d	16.9
18	"	"	2.4	46	"	J-72-a	1.0	74	"	I-74-b	16.9
19	"	"	1.1	47	"	J-72-d	2.0	75	"	I-73-b	11.5
20	"	"	1.4	48	"	I-72-c	0.8	76	"	I-74-b	26.0
21	"	"	1.4	49	"	"	2.6	77	"	I-72-c	30.4
22	"	"	1.6	50	"	I-74-b	7.2	78	"	I-75-d	10.1
23	"	"	2.0	51	"	I-72-c	5.0	79	"	I-74-c	11.6
24	"	J-72-a	1.5	52	"	J-72-a	1.7	80	"	I-74-b	30.4
25	"	I-74-b	1.8	53	"	"	1.9	81	"	J-72-d	23.5
26	"	I-74-a	1.4	54	"	J-74-a	0.5	82	"	K-72-d	15.9
27	"	I-74-b	1.3	55	"	I-73-c	1.3	83	"	J-72-d	14.7
28	"	I-72-c	1.5	56	"	J-72-d	0.7	84	"	I-74-a	22.2

表3 図掲載石器等一覧(2)

番号	種別	出土区	重量	番号	種別	出土区	重量	番号	種別	出土区	重量
85	つまみ竹	K-73-a	14.7	120	ナイフ スクレイバー	I-74-b	29.9	155	玉	I-74-b	0.6
86	"	I-72-c	18.2	121	"	I-72-c	60.5	156	土玉	石組炉	0.1
87	"	"	15.8	122	"	I-74-c	42.4	157	"	J-72-a	1.6
88	"	"	2.4	123	"	I-72-c	76.6	158	石製品	I-74-b	7.2
89	"	I-74-c	15.8	124	"	I-73-c	181.3	159	土偶	I-72-c	5.0
90	"	I-74-b	14.0	125	"	J-73-c	146.1	160	土製品	"	5.6
91	"	I-73-c	18.4	126	石模	I-72-c	32.0	161	"	"	8.9
92	"	I-74-b	12.0	127	"	"	51.1	162	土版	K-72-d	49.3
93	エンド スクレイバー	I-75-d	39.8	128	"	"	58.4	163	"	I-73-b	57.2
94	"	I-72-c	41.2	129	"	I-74-b	101.8	164	土製品	J-72-d	7.9
95	"	J-72-a	10.4	130	"	I-72-c	77.3	165	耳飾	I-72-c	15.8
96	ナイフ スクレイバー	I-72-C	2.2	131	"	I-74-b	106.2	166	"	I-74-b	16.5
97	"	I-74-c	13.0	132	"	I-73-b	257.2	167	"	J-74-a	3.2
98	"	J-74-a	15.8	133	"	I-73-d	321.0	168	"	I-73-c	37.3
99	"	I-72-c	16.8	134	磨製石斧	I-72-c	2.4	169	"	J-72-d	52.8
100	"	I-74-b	32	135	"	I-74-b	15.0	170	剝片	J-73-d	2.1
101	"	I-74-a	9.5	136	"	J-73-d	18.6	171	"	"	4.4
102	"	J-73-c	37.7	137	"	I-73-c	122.2	172	"	"	8.0
103	"	"	77.3	138	"	I-72-c	25.1	173	"	"	7.4
104	"	I-73-c	122.4	139	"	"	34.0	174	"	"	7.4
105	"	I-74-c	0.9	140	"	"	65.2	175	"	"	7.3
106	"	I-72-c	2.8	141	"	J-72-d	53.3	176	"	"	11.4
107	"	J-73-c	6.4	142	"	"	186.0	177	"	I-73-c	15.2
108	"	I-72-c	33.0	143	"	I-72-c	188.3	178	"	J-73-d	10.1
109	"	"	27.6	144	石鏟	J-72-a	22.5	179	"	"	24.0
110	"	J-74-a	10.7	145	"	"	15.6	180	"	"	5.8
111	"	I-73-b	20.8	146	たたき石	I-72-c	205.9	181	"	"	9.1
112	"	I-74-c	10.9	147	"	J-72-d	291.9	182	"	"	12.1
113	"	J-75-d	30.9	148	"	J-74-a	1,000	183	"	"	16.7
114	"	K-73-a	21.5	149	砥石	I-72-c	-	184	"	"	30.4
115	"	I-73-c	37.9	150	"	J-74-a	-	185	"	"	12.9
116	"	J-72-b	78.4	151	"	J-73-c	-	186	"	"	62.8
117	"	J-75-a	70.7	152	"	I-73-c	-	187	"	"	28.4
118	"	I-72-c	22.8	153	"	"	-	188	"	I-73-c	12.6
119	"	J-73-c	37.4	154	玉	I-72-c	0.4				

V 火山灰について

火山灰層は、離れた地域の地層や地形面、あるいは遺構や遺物の編年を行う際に重要な鍵層となる。本遺跡とその周辺では数枚の火山灰層が認められた。ここでは、これらを上位から Yn-a ~ d (仮称) と呼び、火山灰の記載を行って他地域の火山灰との対比や編年、噴出源推定のための基礎資料とする。なお、昭和58年度に発掘が行われた湯の里2・4遺跡の火山灰についても合わせて報告する。

1. 試料の処理

火山灰試料は以下の手順で処理し検鏡した。湿重量約50g (試料によっては数g) から水がけ法により泥質分を除去 → 6% H₂O₂・10%処理 (60°Cで湯煎) → 筛で粒径1/4~1/8mmに揃える → カナダパルサムを封入剤としてプレパラートを各試料2枚作成 → 偏光顕微鏡下で500個以上を検鏡 → 各鉱物の量比を個数%で表わす。

別に、火山ガラスを200個以上検鏡し、形態分類を行い個数比を求めた。ただし、試料によってはプレパラート2枚を検鏡しても200個に満たないものがあった。火山ガラスの形態は、主に気泡の形状と大きさや粒子全体の形状によって以下のように分類した。

B型：気泡が微細で粒子全体の形状が球果状。軽石様で微細な不透明鉱物を含む。

F型：偏平で、気泡が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L-C型：気泡が破碎し、泡壁がridgeをなして直線～曲線状に数本走るもの。

M型：気泡と泡壁のつくる模様が網目状に見えるもの。気泡の大きさは粒径の1/2以下。

N型：B型に似るが、粒子周縁部で比較的薄く、針状の気泡・条線が認められるもの。

P型：薄い平板状。ridgeが1~2本走る場合がある。

UT：未分類。

2. 各火山灰の特徴

火山灰の層序を図25、鉱物組成を図26に示す。また、顕微鏡写真を写真図版に示す。

I-2をYn-a、I-3、II-4、III-4、IV-3 l. g. をYn-b、II-6、III-6、IV-3 u·m·lをYn-c、I-5をYn-dと呼ぶことにする。

Yn-a 全層がほとんど腐植土化した黒褐色(7.5YR 2/2-湿。以下同じ。-)の降下火山灰。層厚13cm。比較的新鮮な部

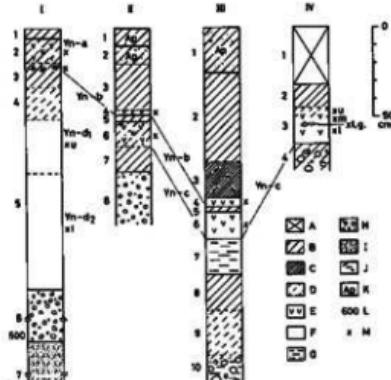


図25 地質柱状図

凡例 I : 湯の里2遺跡 G-43と周辺から採集 II : 湯の里4遺跡 O-67附近 III : 湯の里3遺跡 J-7E附近 IV : 湯の里3遺跡 J-7E附近 A : 砂土 B : 黒色粘土質腐植土 C : 黑色深成質腐植土 D : 带褐色粘土質腐植土 E : シルト質隔下火山灰 F : 黄褐色粘土質隔下火山灰 G : 粘土 H : 粘土 I : 黄灰岩 J : 黄褐色粘土 K : 新耕土 L : 層厚(cm) M : 試料採取層番 u : 上部 m : 中部 l : 下部 Lg : 灰白色シルト質隔下火山灰 (二次的に活動)



図26 火山灰の鉱物組成

凡例 HM:重鉱物 Qz:石英 FI:長石 BI:黑雲母 Am:角閃石 oPpx:斜方輝石 dPpx:單斜輝石 O1:橄欖石 Opq:不透明鉱物(鉄鉱石) GI:火山ガラス WG:風化鉱物粒 LF:岩片 PI:植物起源粒 +:1% ●:僅少 火山ガラスの型は本文参照

分では黄褐色(10YR 5/5)シルト質である。重鉱物に富み、重鉱物量比は、単斜輝石>斜方輝石=角閃石で、cPx比(単斜輝石/全輝石)は0.75、角閃石はほとんどが褐色系である。土壤化が進んでいるため火山ガラスは少ない。

Yn-b 灰白色(7.5YR 8/2, 2.5Y 8/2), にぶい黄橙色(10YR 6/3)を呈するシルト質降下火山灰。層厚2~5cm。腐植土中に斑点状に産することが多い。III-4の試料を除いては、ほとんどすべて火山ガラスから成る特異な火山灰である。僅かの斜長石と輝石(特に斜方輝石)を伴う。火山ガラスはほとんどがM型である。本火山灰は、より下位の層中に斑点状や糸状をなして産することがある(図25-IV)。これは土壤動物等によって持たらされたと考えられ、鉱物組成上Yn-bである。

Yn-c Yn-bの下位に腐植土を挟んで堆積している。場所によっては腐植化が進んでいるが、一般に褐色(10YR 4/4), 黄褐色(10YR 5/6), 明黄褐色(10YR 6/6)を呈するシルト質降下火山灰。層厚15cm土。湯の里3遺跡において連続性が良い。斜長石と火山ガラスに富む火山灰である。II-6の試料では重鉱物が比較的多く、単斜輝石>斜方輝石=角閃石で、cPx比は0.63、角閃石は褐色系が過半を占める。火山ガラスは15~50%で、ほとんどすべての型が含まれるが、比較的B, M, F, L-C型が多い。図25-IIIでは、Yn-bとともに粘土や泥炭質腐植土に挟まれ、湿地性の環境に堆積したものと考えられる。堆積環境を反映して、珪藻や植物硅酸体が数%含まれる。図25-IV-3では、色調の違いから三層に区別し得るが、鉱物組成上は大差ない。ただし、下部はやや粘土分が多い。本火山灰直下の腐植土中から、縄文時代後期末葉、同晩期および統繩文時代の遺物が出土する。

Yn-d 風化が進んで粘土化した黄褐色(10YR 5/6)の降下火山灰(いわゆる「ローム」)。湯の里2・4遺跡が立地する標高約35mと40mの河成段丘面を覆い、段丘疊層の直上に堆積しているものを一括して呼ぶ。湯の里2遺跡では、土壤構造の違いから上部のd₁と下部のd₂に区分する。d₁は層厚30cm、やや loose で軟かい。d₂は層厚65cm、壁状構造を呈し、緻密で硬い。重鉱物に富み、d₁は角閃石=単斜輝石>斜方輝石で、cPx比は0.73、角閃石はすべて褐色系である。d₂は単斜輝石>斜方輝石>角閃石で、cPx比は0.66、角閃石はすべて褐色

系である。 d_1 , d_2 ともに火山ガラスは僅少。湯の里 4 遺跡では、 $Yn-d$ 中から旧石器時代の遺物が出土しているが、その産出層準は明確ではない。

その他、現地表面附近には、断片的に灰白色の火山灰が点在する。山田(1985)はこれを駒ヶ岳火山灰 d_2 層(K_o-d_2)に対比した。ここではこの火山灰については取り扱っていない。

3. 火山灰の年代

遺物との関係から、 $Yn-c$ は統繩文時代かそれ以降であると考えられる。 $Yn-d$ については、湯の里 4 遺跡出土の黒曜石製石器の水和層年代が $11,300 \pm 600$ ~ $13,900 \pm 700$ Y. B. P. を示している(近堂・柳原, 1985)ので、 $Yn-d$ もこれに近い年代だと考えられる。他の火山灰については、本遺跡から直接に年代を知る資料は得られていない。火山灰層序と年代を模式的に図27に示す。

4. まとめ

北海道火山灰命名委員会(1982)や佐々木他(1970)によれば、知内地域は乙部層、 O_s-a , O_s-b , O_s-c 等の分布域に入っている。本遺跡とその周辺で認められた火山灰とこれらとの関係については、 $Yn-b$ はガラス質であることから乙部層、 $Yn-c$ は時代的に K_o-e ($1,700 \pm 130$ Y. B. P. - 佐々木他, 1971-)にそれぞれ対比される可能性があるが、詳細は以下のところ不明である。 $Yn-b$ は特異な鉱物組成とM型火山ガラスから成る点で、追跡は比較的容易であると考えられる。 $Yn-c$ は統繩文時代かそれ以降の鍵層として重要である。 $Yn-d$ は、渡島半島部に広く分布する粘土化した更新世の降下火山灰に、一つの年代を与えた点で重要であり、今後、地形面との関係や産状、より詳細な鉱物組成等の検討から、その層準を確立することが必要である。

引用文献

- 北海道火山灰命名委員会(1982)：北海道の火山灰。24pp.
 近堂祐弘・柳原哲司(1985)：湯の里 4 遺跡出土の黒曜石石器の水和層年代。北海道埋蔵文化財センター、湯の里遺跡群一津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書一, pp. 215-217.
 佐々木竜男・片山雅弘・音羽道三・天野洋司(1970)：渡島半島の火山灰について。北海道農業試験場土性調査報告。No 20, pp. 255-281.
 佐々木竜男・片山雅弘・富岡悦郎・佐々木清一・矢沢正士・山田 忍・矢野義治・北川芳男(1971)：北海道における腐植質火山灰の編年に関する研究。第四紀研究, Vol. 10, No 3, pp. 117-123.
 山田悟郎(1985)：湯の里 2・4 遺跡の古植生について。北海道埋蔵文化財センター、湯の里遺跡群一津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書一, pp. 11-19.

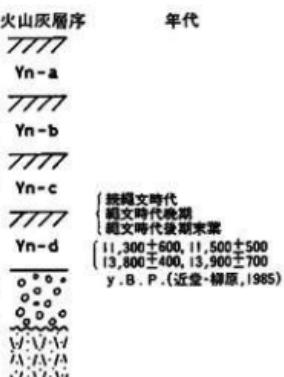
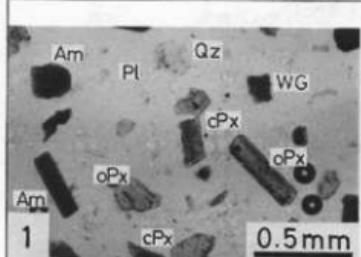
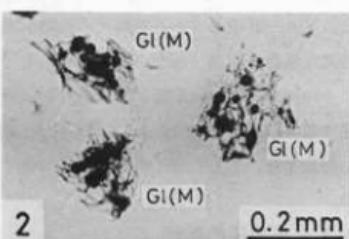


図27 湯の里 3 遺跡周辺の火山灰層序と年代を示す模式図
(凡例は図25参照)



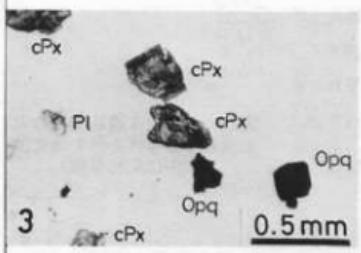
1

0.5 mm



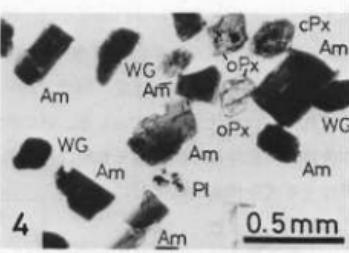
2

0.2 mm



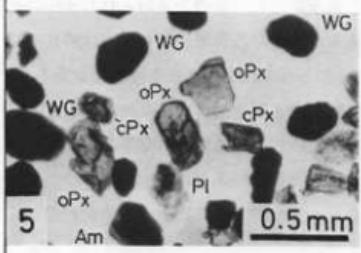
3

0.5 mm



4

0.5 mm



5

0.5 mm

Qz : 石英 Pl : 斜長石

Am : 角閃石 oPx : 斜方輝石

cPx : 単斜輝石 Opq : 不透明

鉱物 (鐵鉱物) WG : 風化鉱

物粒 GI (M) : 火山ガラス (M
型)

(すべて単ニコルで撮影)

1 : I - 2 (Yn-a 火山灰)

3 : II - 6 (Yn-c 火山灰)

5 : I - 5! (Yn-d₂ 火山灰)

2 : III - 4 (Yn-b 火山灰)

4 : I - 5 u (Yn-d₁ 火山灰)

火山灰の顕微鏡写真

ま　と　め

1. 本遺跡から出土した土器は縄文時代前期・後期・晩期および統縄文時代に属するもので、その主体となるのは縄文時代後期末葉（C群土器）である。ほかに旧石器時代の遺物（剝片・石屑）が出土している。
2. 石組炉の時代・時期について確定はできないが、焼土とII層の黄白色火山灰層との間に埋土がないことから、主体である縄文時代後期末葉より新しい可能性がある。
3. 本遺跡出土のC群土器は、從来道南地方において存在は予想されたところであるが、まとまって出土したのは初めてであり、遺跡名を採って「湯の里3式」と仮称したい。道央部の御殿山式、道東部の栗沢式にはこの式に対比されるものがあり、ほぼ同時期のものと考えられる。
4. 朱漆塗の櫛が2点出土しており、これは縄文時代後期末葉のものである。道南部では、松前町上川遺跡からも出土しているが、それは縄文時代晩期中葉（大洞C₂）のものであり、本遺跡出土資料はもっとも古いものである。
5. 楕円形を呈する土版がC群土器に伴って2点出土しており、いずれも三叉文が施されている。北海道では土版の出土例はきわめて少なく、サイベ沢遺跡⁽²⁾・手稻遺跡⁽³⁾・朱円遺跡などにおいてその出土が報じられているが、これらは土版としては疑問が多く、土版と言いうるものは本例が最初ではないかと考えられる。
6. 旧石器時代の遺物はすべて剝片・石屑であり、その時期を決定する根拠はないが、昭和59年度の調査で出土した石刃および昭和58年度の湯の里4遺跡の調査結果からみて、「湯の里4石器群（A・B）」の一員である可能性が高い。
7. II層の黄白色火山灰の下位から統縄文時代の遺物が出土しており、その降下年代について一つの手懸りが得られたが、起源については不明である。
8. 本遺跡の性格、とくにその主体となる縄文時代後期末葉頃の性格については、明らかにしたいが、遺跡の立地や漆塗製品・土製品・石製品などの出土遺物からみて、祭祀的な性格が考えられる。祭祀の内容については、当該期における墳墓の造営方法（例えば静内町御殿山遺跡）から推測して、河川における礫採取にかかわるものであろうか。

註

- (1) 久保 春 1977 「北海道松前町上川遺跡における縄文晩期土壙墓の調査」『考古学ジャーナル』No.133
- (2) 児玉作左衛門・大場利夫・武内収太 1958 「サイベ沢遺跡」
- (3) 大場利夫・石川 徹 1956 「手稻遺跡」
- (4) 河野広道 1955 「先史時代史」『斜里町史』



調査状況



石組炉検出状況



C群土器・櫛（No. 3）出土状況



石組炉

図版II



調査状況



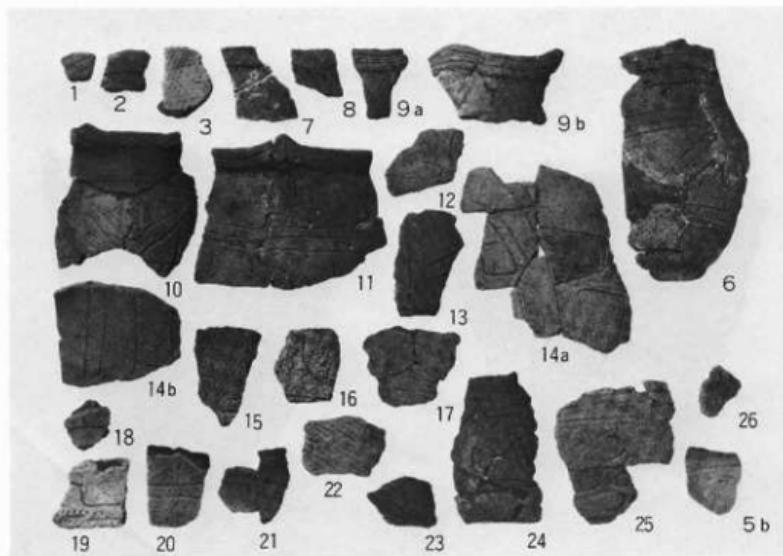
河川跡部分



4



5a



A群 (1~3)・B群土器



27



28



29



30

C 群 土 器 (1)



31



34



32



35



33



36

C 群 土 器 (2)



37



39



38



40

C 群 土 器 (3)



41



42



43

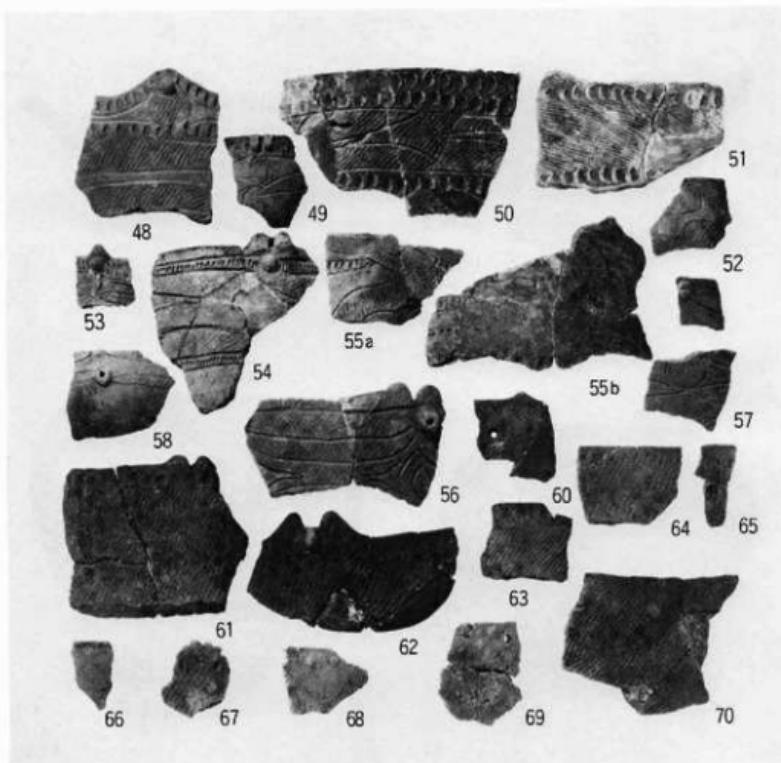
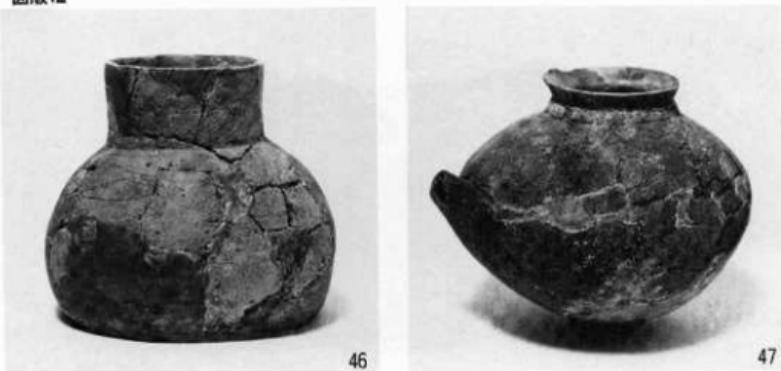


44

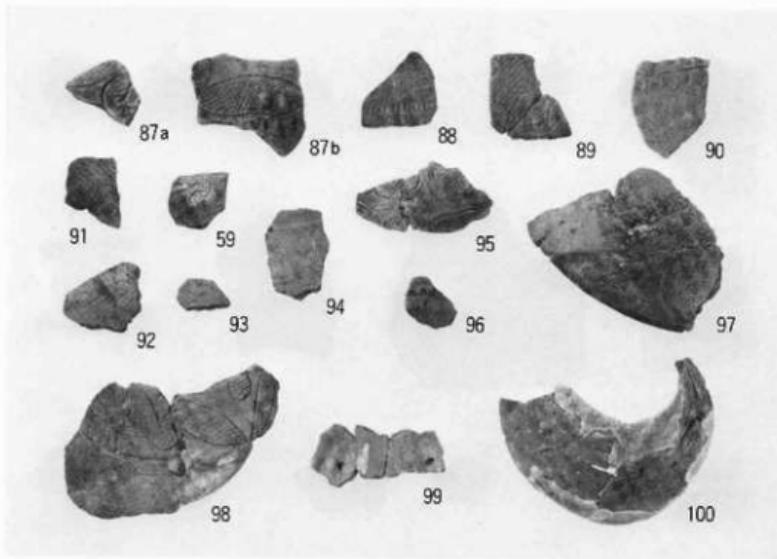
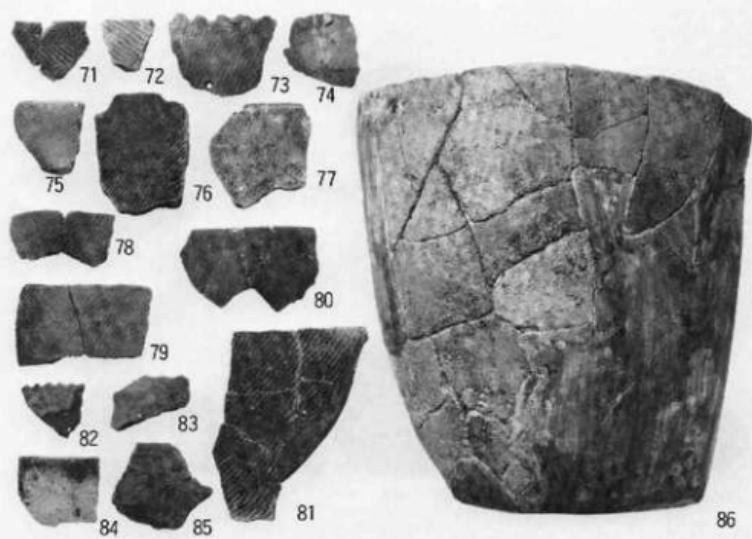


45

C 群 土 器 (4)

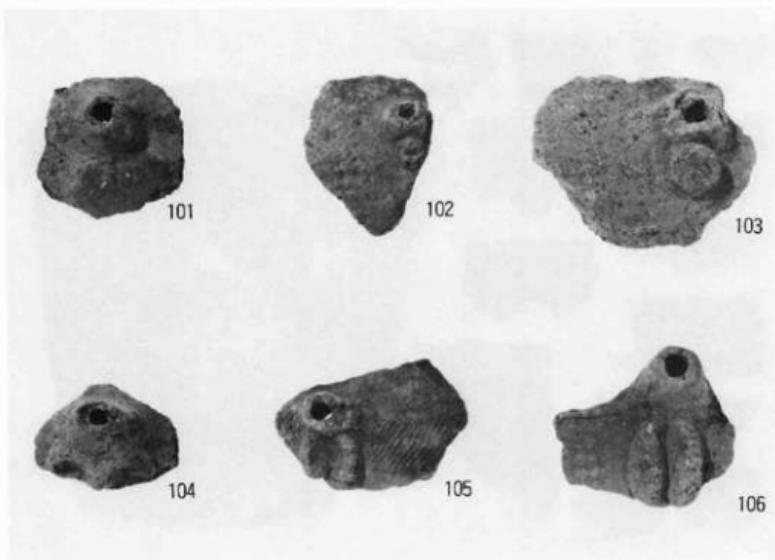


C群土器(5)

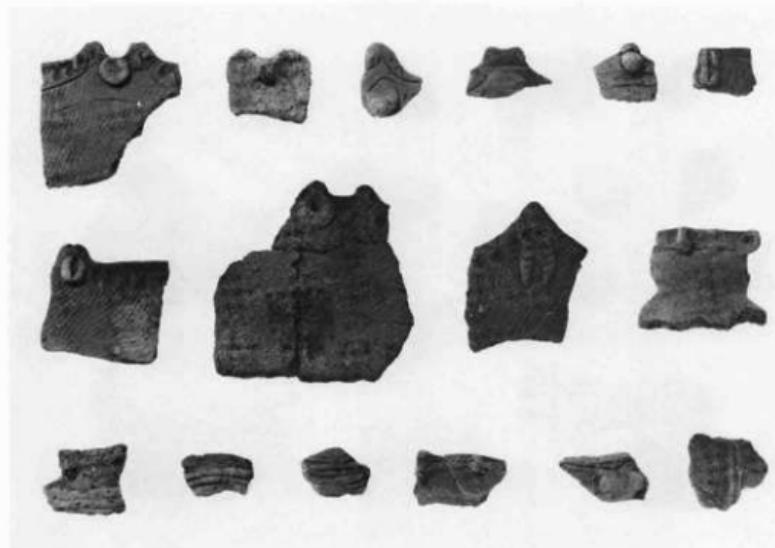


C群土器(6)

圖版 X



C群土器注口部



C群土器突起貼付例



107



111



108



109a



109b



110a



110b



110c



112a



112c



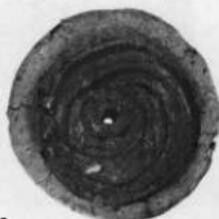
113



112b

D群 (107・108)・E群土器

図版XXI



土製品・石製品



(財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告 第32集

湯の里 3 遺跡

— 津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(2) —

昭和61年3月31日 発行

編集・発行 財團法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目 TEL(011)561-3131

印 刷 俳總北海札幌支店

001 札幌市北区北30条西5丁目 TEL(011)757-6995
